昭和５８年度

遺跡現地説明会資料

1．居住・小山遺跡（A地区）

2．頭 高 山 遺 跡

3．神 楽 町 遺 跡

4．郡家遺跡（昭和58年度第４次）

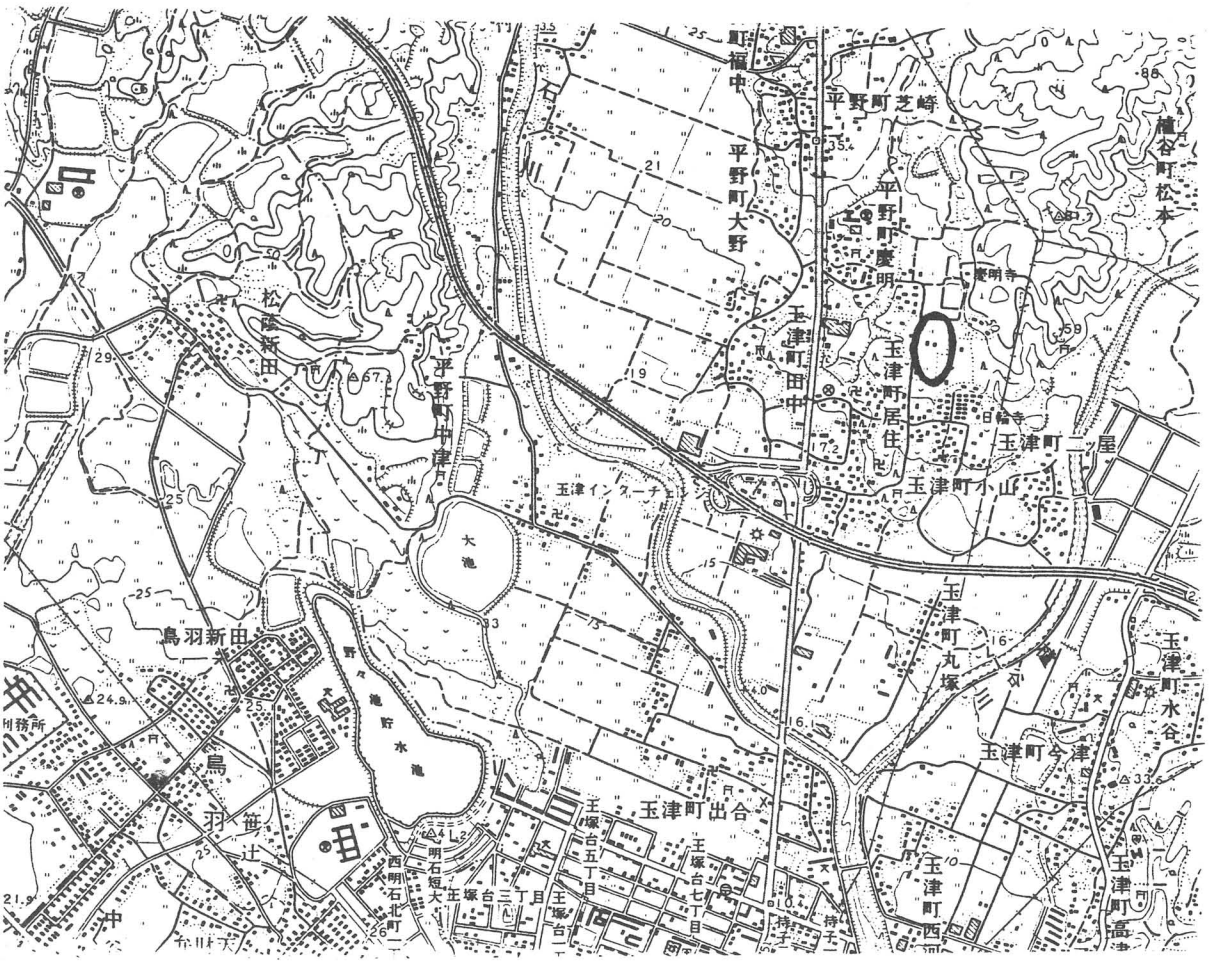
5．下 宅 原 遺 跡

神 戸 市 教 育 委 員 会

居住・小山遺跡A地区現地説明会資料

神戸市西区玉津町居住・小山所在

周辺地形図



神戸市教育委員会

昭和58年4月24日

神戸市居住小山住宅街区整備組合、
都市整備公社の協力を得て調査を
行なっています。

居住・小山遺跡Ａ地区

1　はじめに

今回の現地説明会は，昭和５８年１月初めから発掘調査を実施した居住・小山遺跡Ａ地区について行います．

Ｂ地区については，昭和５７年１１月から発掘調査を開始し，昭和５８年１月２３日に現地説明会を行いました．

調査地区位置図

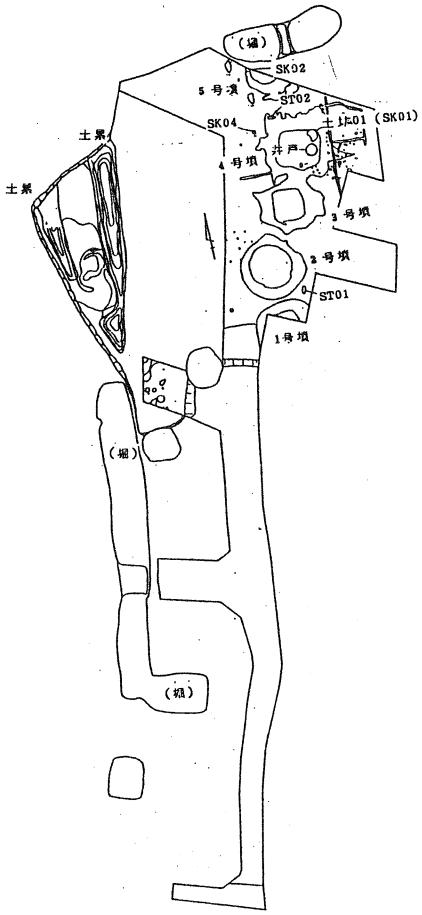
2　B地区の概要

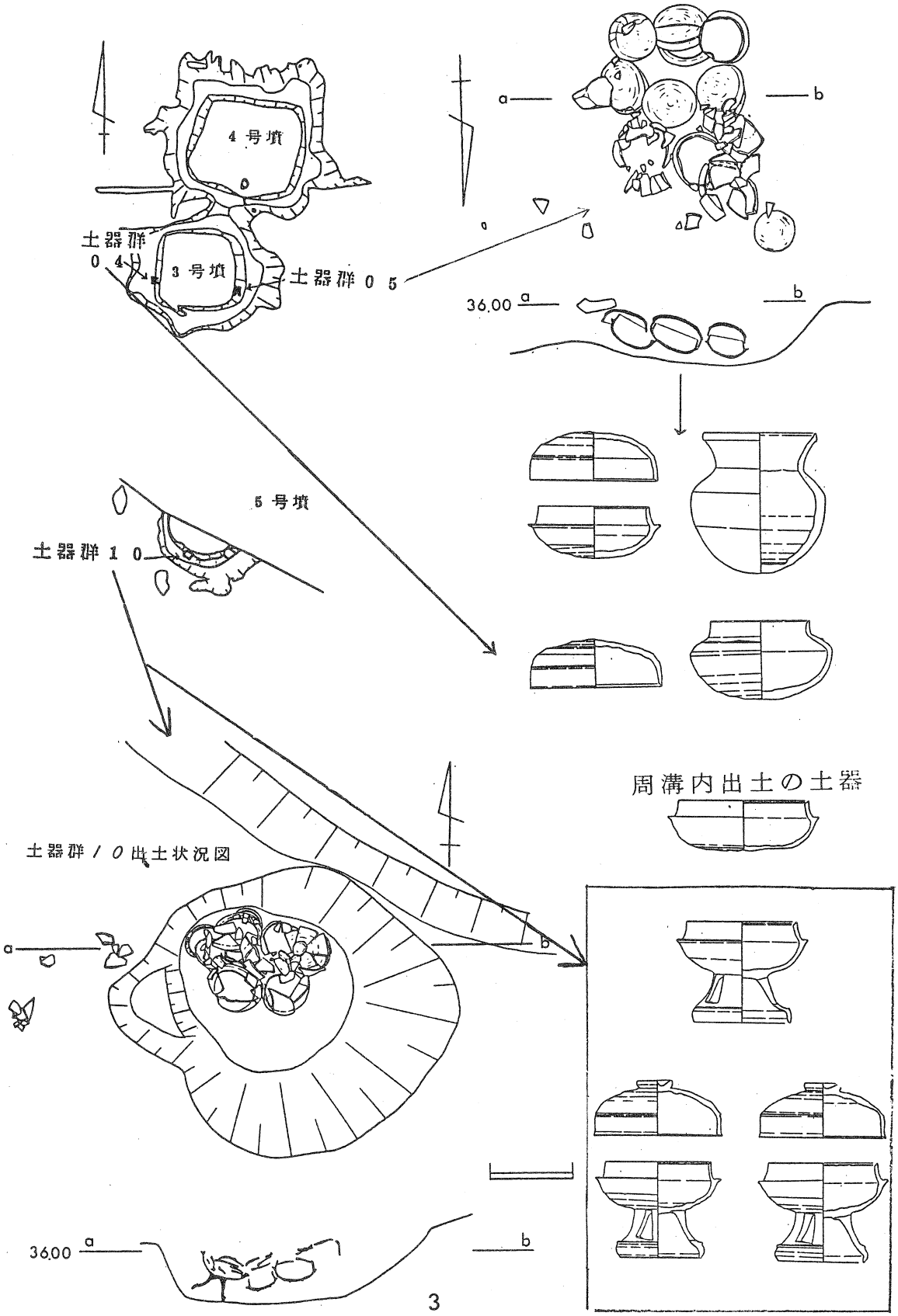
B地区では，まったく予想できなかった古墳（６世紀初頭）が５基確認されました．これらの古墳は，１２世紀ごろの開墾によって墳丘（盛土）が削り取られていました．そのための発掘調査によって確認されたのは周濠だけでした．

存在していた５基のうち，２基は円墳（直径約８ｍ），３基は方墳（一辺約７ｍ）でした．周濠からは，死者へのお祭りのときに使ったと思われる土器が出土しました．

また，古墳の近くには小児用の土器棺や木棺直葬墓などの遺構が検出され，同一面で１２世紀から１４世紀ごろまでの柱穴，土壙，井戸なども発見されました．性格は不明ですが，１６世紀以降と考えられる土塁が２条みつかりました．（東側の土塁は，幅６ｍ，現存高1.6ｍ，現存長約５０ｍ，西側のものは，幅４ｍ，現存高1.0ｍ，現存長約３０ｍ）

Bトレンチ平面図



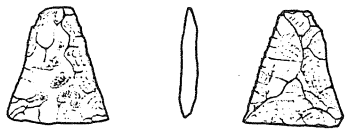

4号墳
3号墳
土器群04
土器群05
a
b
36.00
5号墳
土器群10
周溝内出土の土器
土器群10出土状況図
3

3　A地区の概要

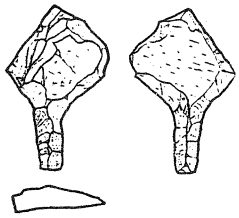
(1)　弥生時代

弥生時代の遺構は，住居址や土壙でトレンチの南半で見つかっています．直径約7mの竪穴式住居址からは，サヌカイト製の石鏃（せきぞく）・石錐（せきすい）などの石器を作る際にできる石くずが多量に出土しました．

また，碧玉（へきぎょく）製の管玉や，少量ですが貝殻も出土しています．おそらくここで生活に必要な石の道具を作っていたと考えられます．時期は，弥生時代の中ごろ（第Ⅲ様式古段階約１９００年前）のものです．



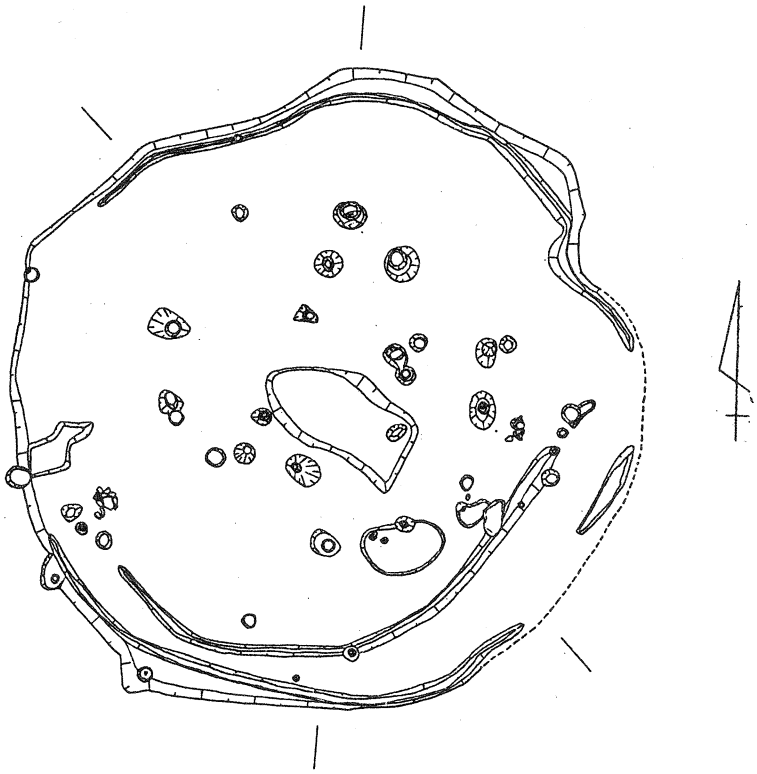
石　鏃



石　錐

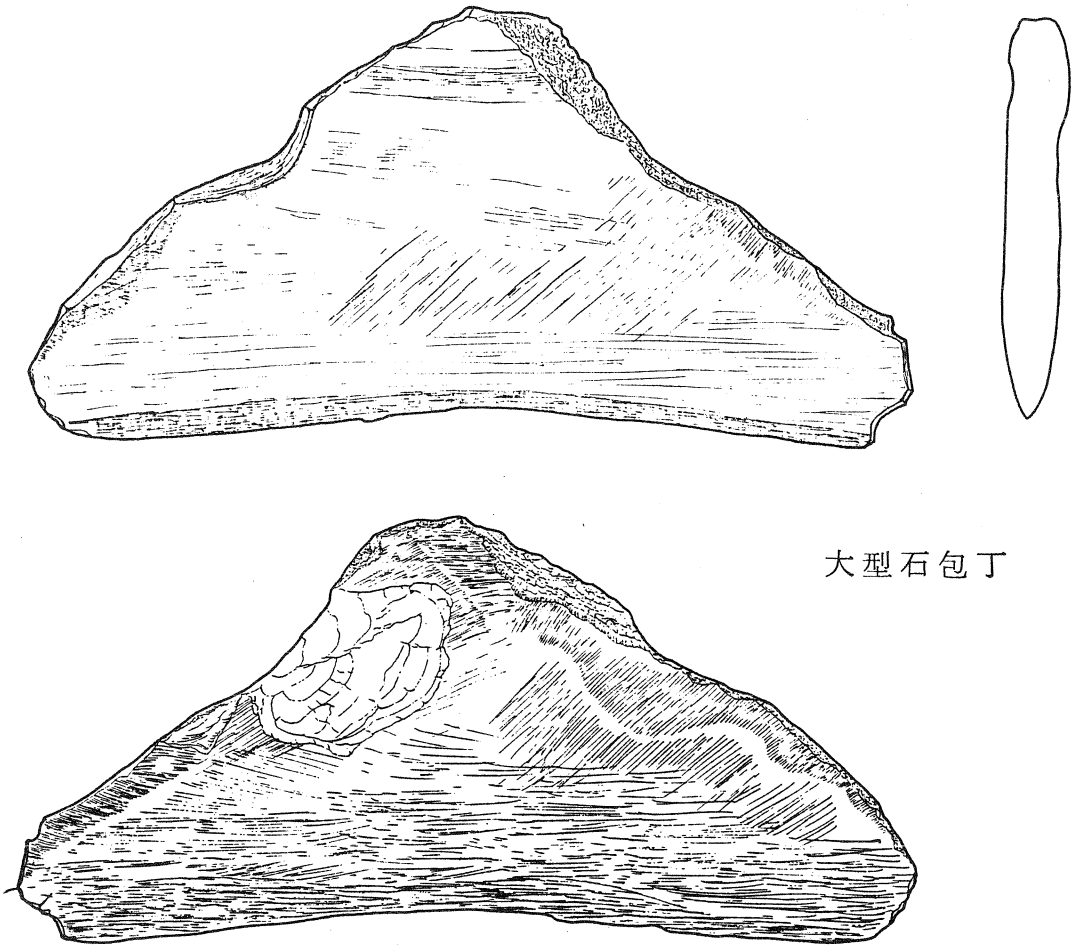
管玉

0　5

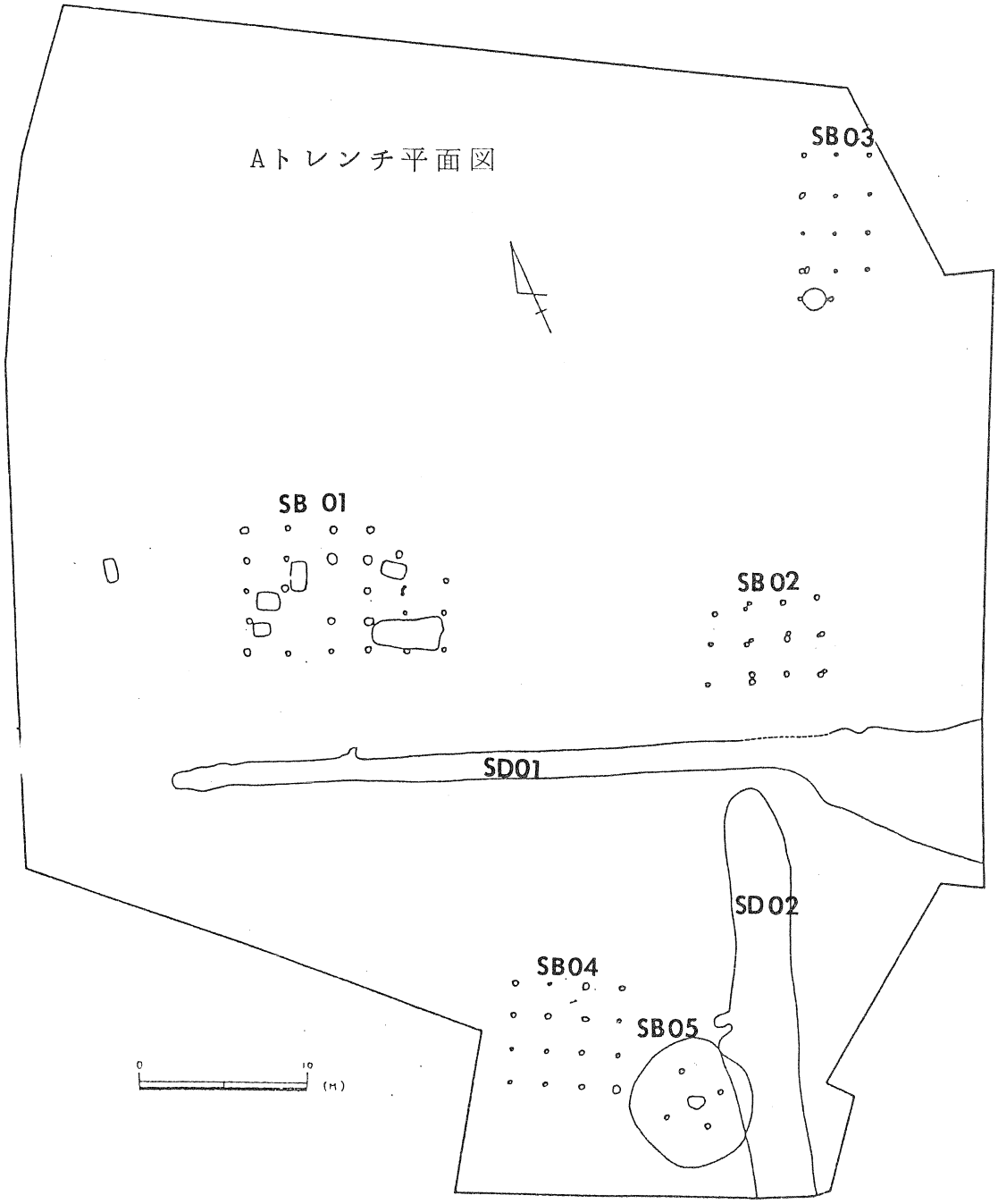


SB05（竪穴式住居址）　0　3

この竪穴式住居址のすぐ北の落ち込みからは，石包丁や大型の石包丁が出土しています．無孔の大型石包丁はめずらしく，まだ用途がよくわかりませんが，よく使われており，かなり刃部がすり減っています．

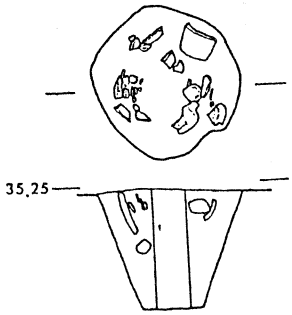


(2) 鎌倉時代　　鎌倉時代後半（１３世紀後半ごろ）の掘立柱建物址が４軒見つかりました.



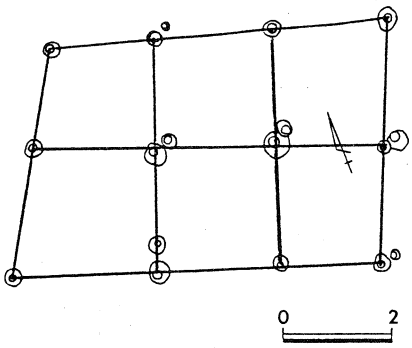
6

ＳＢ０１



４間×３間あるいは，４間×４間の東西向きの建物址です．規模は，東西7.3ｍ又は9.5ｍ，南北7.2ｍです．柱穴は深く，約５０cm位あります．そして柱掘り方の内には，石や土器あるいは瓦等を入れて根固めをしています．

ＳＢ０２



２間×３間の東西向きの建物址です．規模は，東西6.8ｍ，南北約4.3ｍです．柱の太さは，ＳＢ０１よりもやや小さく直径１０～１５cmです．北東隅の柱穴には，地鎮に使ったものではないかと考えられる小皿が出土しています．

ＳＢ０３

２間×３間の南北向きの建物址です．規模は，東西４ｍ，南北8.4ｍです．柱は細く約１０cmですが，掘り方にはしっかりとこぶし大の石を入れて根固めをしていました．

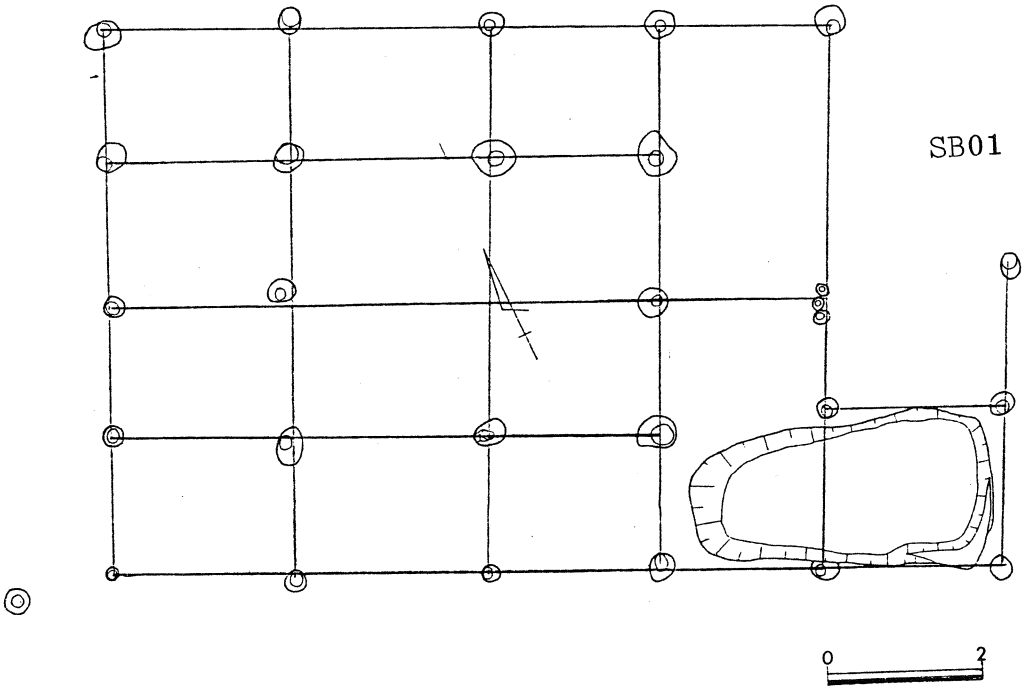
ＳＢ０４

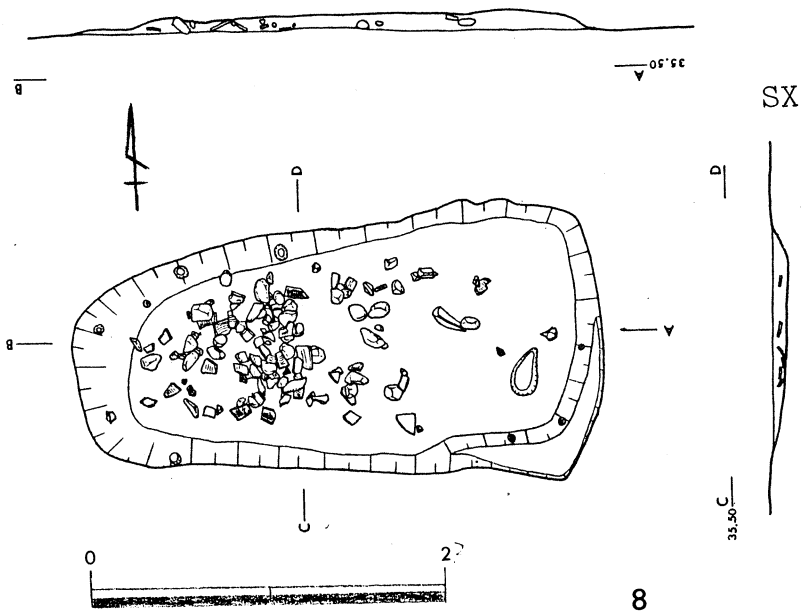
３間×３間の東西向きの建物址です．規模は，東南6.5ｍ，南北6.0ｍです．柱の太さは，ＳＢ０２と同じ位です．

ＳＤ０１

土地を区画する意味の溝と考えられます．深さは約３０cmぐらいで東に向って低くなっています．

ＳＤ０１から北にあるＳＢ０１～０３が一軒の「家」と考えられます．おそらくＳＢ０１が瓦葺きの母屋で０２，０３が納屋のような建物だったと推定できます．





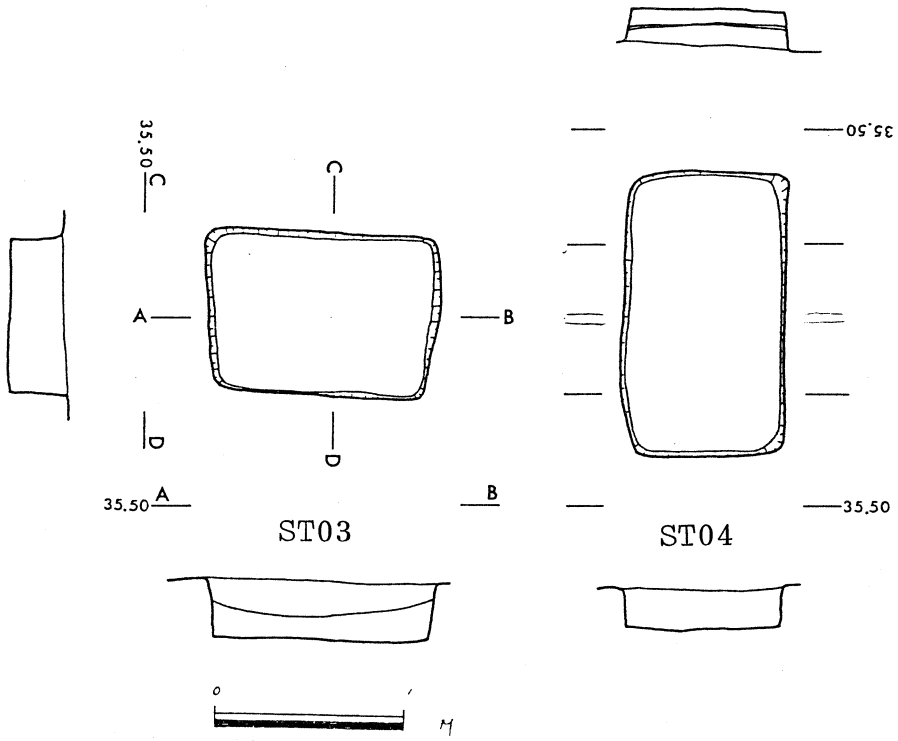
SX01遺物出土状況

8

墓

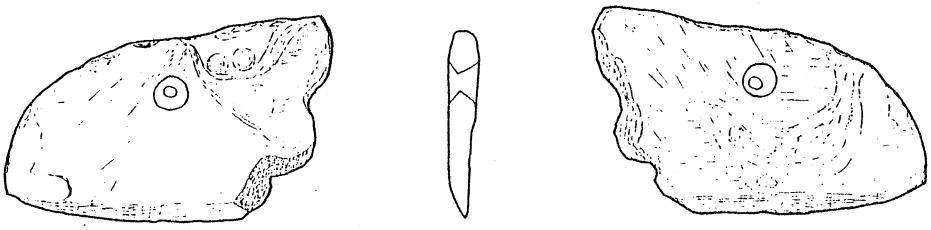
ＳＴ０１～ＳＴ０５の５基が見つかりました．建物と同時期あるいは若干後につくられたものと考えられます．墓の内からは，小皿や古銭（景徳元宝，□□元宝など）が出土しています．

「景徳元宝」



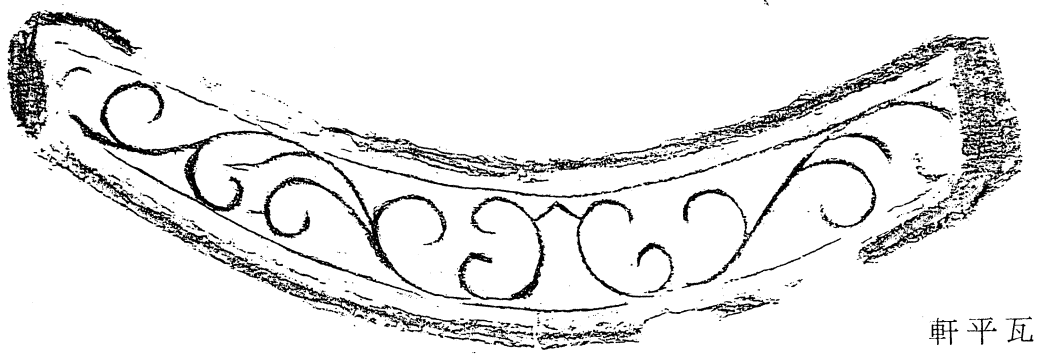
ま と め

B地区の調査によって明らかになったことは，明石川や周辺の平野を見降す台地の縁辺部（標高約３６ｍ）に弥生時代中期（約１９００年前）のムラをつくっていたこと，今回発見された住居址は，自分たちの使う石器を作っていた場所であったこと，そして鎌倉時代後半（約７００年前）になると「庄屋クラス」の屋敷が造られたことなどがわかりました．



石包丁

軒丸瓦

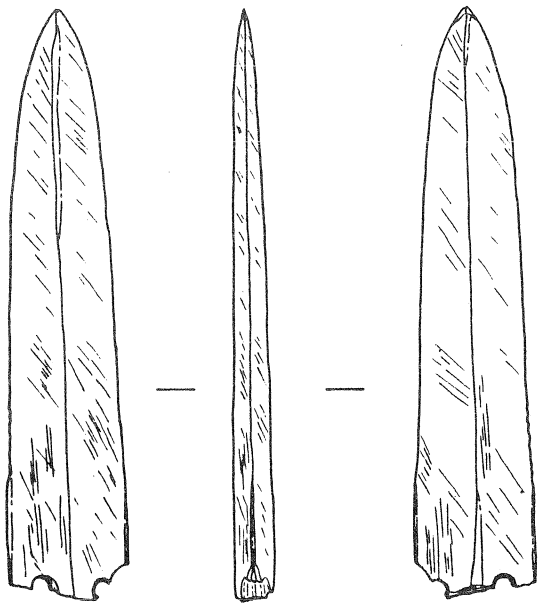


軒平瓦

11

1、新方遺跡
2、吉田南遺跡
3、池上ロノ池遺跡
4、今津鎌田遺跡
5、居住遺跡
6、田中遺跡
7、池上北遺跡
8、青谷遺跡
9、北別府遺跡
10、南別府遺跡
11、如意寺東山遺跡
12、大歳山遺跡
13、出合遺跡
14、西神62地点
15、王塚古墳
16、天王山古墳群
17、瓢塚古墳
18、中村古墳群
19、印路古墳群
20、舞子　古墳群
21、投上銅鐸出土地

頭高山遺跡現地説明会資料



昭和58年7月24日

神戸市教育委員会

調査について、神戸市文化財専門委員 野路脩左、小林行雄
壇上重光の三先生の御指導を得ました。また、神戸市開発局の
協力を得ました。

1　はじめに

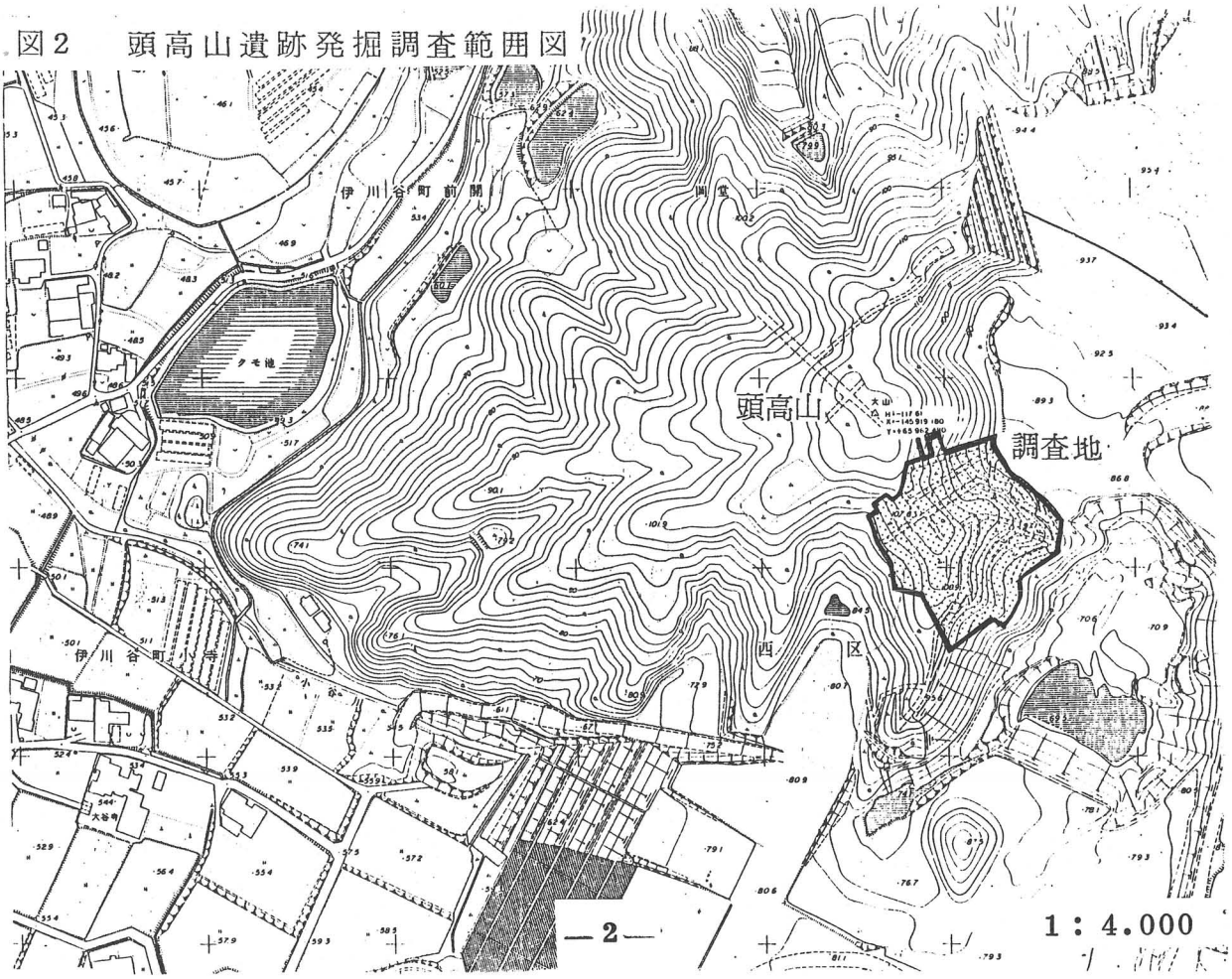
頭高山遺跡は，昭和５３年度に研究学園都市建設予定地内の遺跡確認調査によって発見された遺跡です．昭和のはじめに磨製石剣の出土地として「頭高山」の地名が記録されています．現在この遺物がどこにあるのかは不明ですし，詳しい出土場所についても明らかではありません．しかし，当遺跡から出土したものであったことは，今回の調査でほぼまちがいないものと思われます．

図1　頭高山遺跡位置図

昭和５５．５６年度に試掘調査を実施したところ，頭高山の頂部とそこから派生する尾根のほぼ全体に遺構が存在しており，弥生時代中期（約１８００年前）の集落址であることが確認されました．遺跡は標高９０～１１５ｍの間に存在しており，比高にして約４０～６５ｍの尾根上及び斜面に遺構を形成しています．いわゆる高地性集落跡とよばれるものです．

今回の調査は，頭高山遺跡の南東部で，

図２　頭高山遺跡発掘調査範囲図



頂部から南へ派生する尾根について行いました．平野部から見れば頭高山遺跡のなかで 最も奥に位置する尾根にあたります．

2　周辺の環境と遺跡

頭高山遺跡は，明石川の支流である伊川左岸の中流域に位置し，伊川によって形成された平野部に臨んだ標高１１７ｍを頂部とする洪積丘陵上にあります．ここからは，南西に明石川とその支流の伊川，枦谷川などによって形成された明石平野や，遠くには瀬戸内海が望めます．

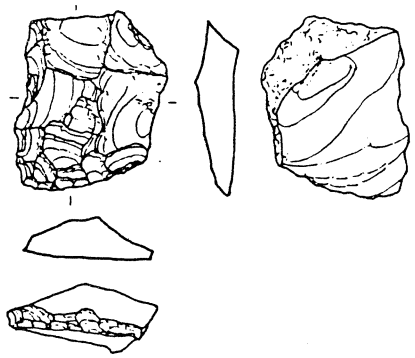


図３ 石製ナイフ　金棒池出土

これらの河川の流域や明石平野には数多くの遺跡が存在しています．約２万年前の後期旧石器時代まで遡る遺物が点々と発見されていますが，まだ生活の痕を示す遺跡は見つかっていません．伊川流域では，池上口ノ池遺跡や大門遺跡でナイフ型石器とよばれる石器が採集されています．

縄文時代に入ると周辺にもいくつかの遺跡が発見されています．垂水区の大歳山遺跡（前期末），舞子浜遺跡（中期），西区では，元住吉山遺跡で後期後半の土器が炉址と共に発見されています．伊川流域では，南別府遺

西神第50号
西神第48号
西神第62号
西神第65号
西　区
如意寺及びその周辺
青谷遺跡
北別府遺跡
南別府遺跡
池北遺跡
頭高山遺跡
高塚山古墳群
伊川谷町井坎
伊川谷町長坂
伊川谷町小寺
伊川谷町有瀬
多聞町
垂水区

図4　周辺遺跡分布図

跡で後期の土器が採集されています．

弥生時代になると，遺跡数も増大し明石平野とその流域の各地に出現してきます．稲作の始まりとされる前期の遺跡として，吉田・新方・片山，今津，居住，西戸田，常本遺跡があり，なかでも，吉田遺跡は近畿地方で最も古い時期の遺跡のひとつに数えられています．このことは，早くから明石平野で稲作を主とする農耕が開始されたことを物語っています．中期になると，平野部だけでなく丘陵上にも集落が出現し，遺跡数も増加してきます．丘陵上の集落は中期後半に，明石川，枦谷川，伊川の中流域に現われ，頭高山遺跡のほか，青谷遺跡，西神５０地点遺跡などが知られています．また，伊川流域のこの時期の遺跡として，平野部にある池上北遺跡，北別府遺跡，南別府遺跡があり，台地上に池上口ノ池遺跡が存在しています．このことは，伊川流域に弥生時代人が定住し，集落拡大と農地開

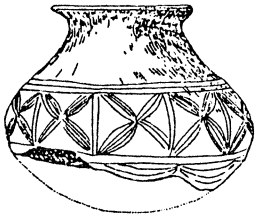
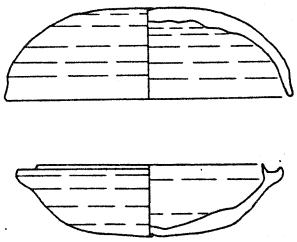
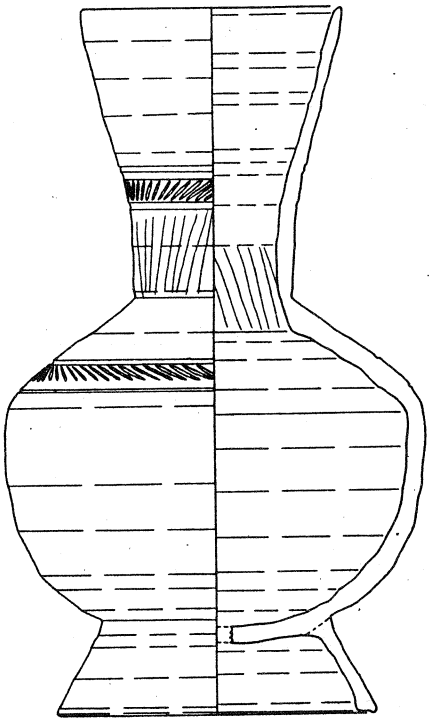


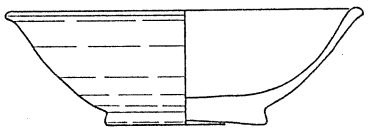
図５　吉田遺跡出土土器



小寺遺跡出土須恵器坏蓋坏身



小寺遺跡出土須恵器長頸壺



小寺遺跡出土緑釉陶器

0　10cm

図6　小寺遺跡出土土器

拓の進展を物語るものです．後期の遺跡としては，吉田南遺跡・高津橋岡遺跡が代表的なものです．

この発展をうけて古墳時代に入ると，伊川右岸の丘陵上に天王山4号墳（4C中頃・方形墳）が築かれ，ついで前方後円墳の瓢塚古墳が造られるようになります．この時期の集落址は吉田南遺跡や池上口ノ池遺跡があります．6世紀代になると古墳の築造が増加し，「群集墳」が形成されます．明石川流域では，西神ニュータウン内や平野町印路，中村などの古墳群があり，伊川流域でも天王山古墳群，鬼神山古墳群，柿谷古墳群があります．頭高山遺跡の所在する伊川谷町小寺でも最近の調査により5～7世紀にかけての遺物が出土し，集落址が存在するものと考えられます．

歴史時代になると明石平野各所に遺跡がみられます．奈良・平安時代の郡衙と考えられる吉田南遺跡がその代表です．小寺遺跡においても平安時代の遺構が検出され，遺物から9世紀後半から10世紀にかけてのものとわ

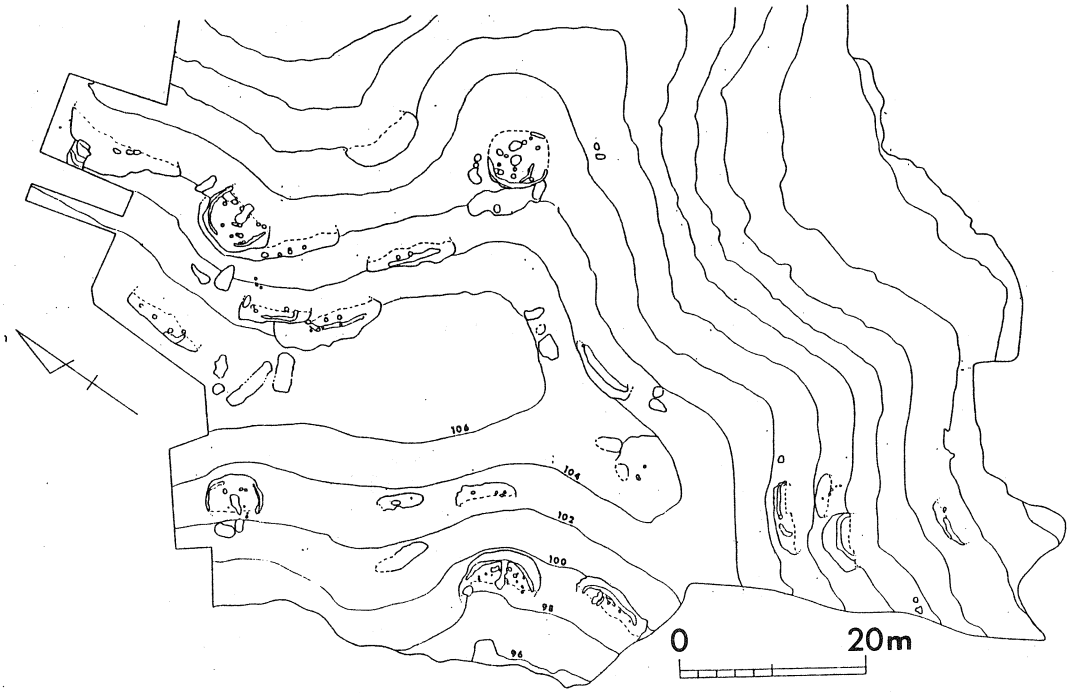
かりました．

3　調査の概要

今回の発掘調査は昭和５７年１１月１５日より，約7,０００m^2を対象に実施しています．

調査の結果，遺構は尾根上平坦面，西，南，東の各斜面から検出されました．検出された遺構は，弥生時代中期の竪穴住居址１６棟，地山切込み遺構６か所，土器棺墓２基のほか土壙１６か所，ピット１２か所です．

図７　遺構全体図



出土した遺物は多量の弥生土器のほか，磨製石剣，石鏃，石斧などの石器類があります．

A 遺　構

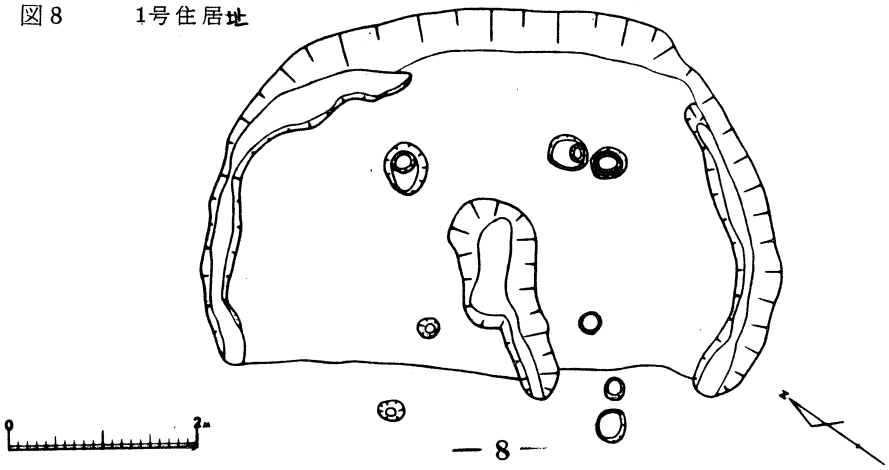
a）　竪穴住居址
（SB01～16）

住居址は斜面上半部の等高線に沿って地山の一部を掘り込み，その土を斜面下方に盛土し，平坦面をつくって建築したものと思われます．住居址の残存部はこの地山を掘り込んだ部分だけのものがほとんどで，下半部は流失し，一部の住居址で盛土と思われる状況が観察されただけです．

西斜面　1号住居址

1号住居址は，長径6.2 m，残存短径3.8 m（推定5 m）の規模で楕円形を呈しています．周溝は南北辺に分かれて設けられ，幅約25cm，深さ5cmのU字状のもので，炭化物を含む土が堆積していました．検出した柱穴から4本柱であったと推定されます．

図8　1号住居址

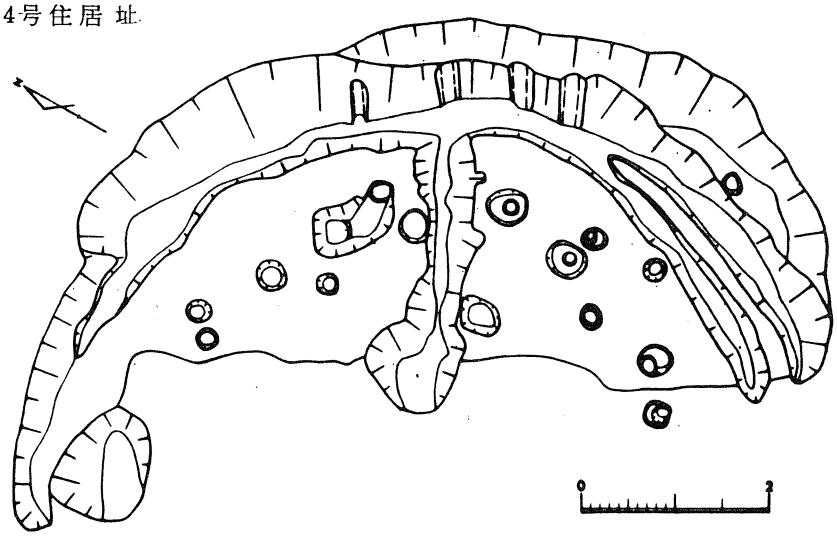


— 8 —

2号住居址　　2号住居址は，残存状態が悪く規模などについてはわかりませんが，床面中央付近に炭の入った焼けた穴があり炉址と思われます．

4号住居址　　4号住居址は長径8.3 m，残存短径3.5 m（推定6.5 m）で6本柱と推定されます．中央の土壙から上方の周溝に向って溝がのび，周溝と一体になっています．中央の土壙とこの溝からは，かなり多量の炭化物が混った土が堆積していました．斜面上方の壁に杭状のくぼみが検出され，何かの建築部材の痕跡ではないかと思われます．また，周溝が南側で二重になっていることや柱穴の配置から拡張が行われたと推定しています．

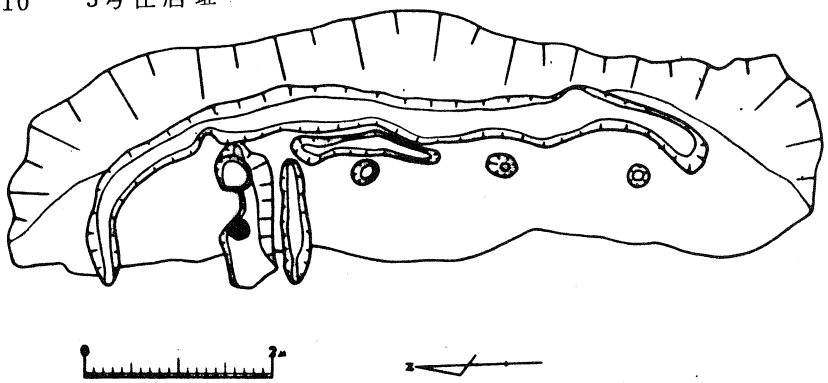
図9　4号住居址



5号住居址

5号住居址は，残在長8.5ｍ，幅2.6ｍで柱穴が4本直列に検出されました．このことから，長楕円形若しくは長方形の住居であったと思われます．

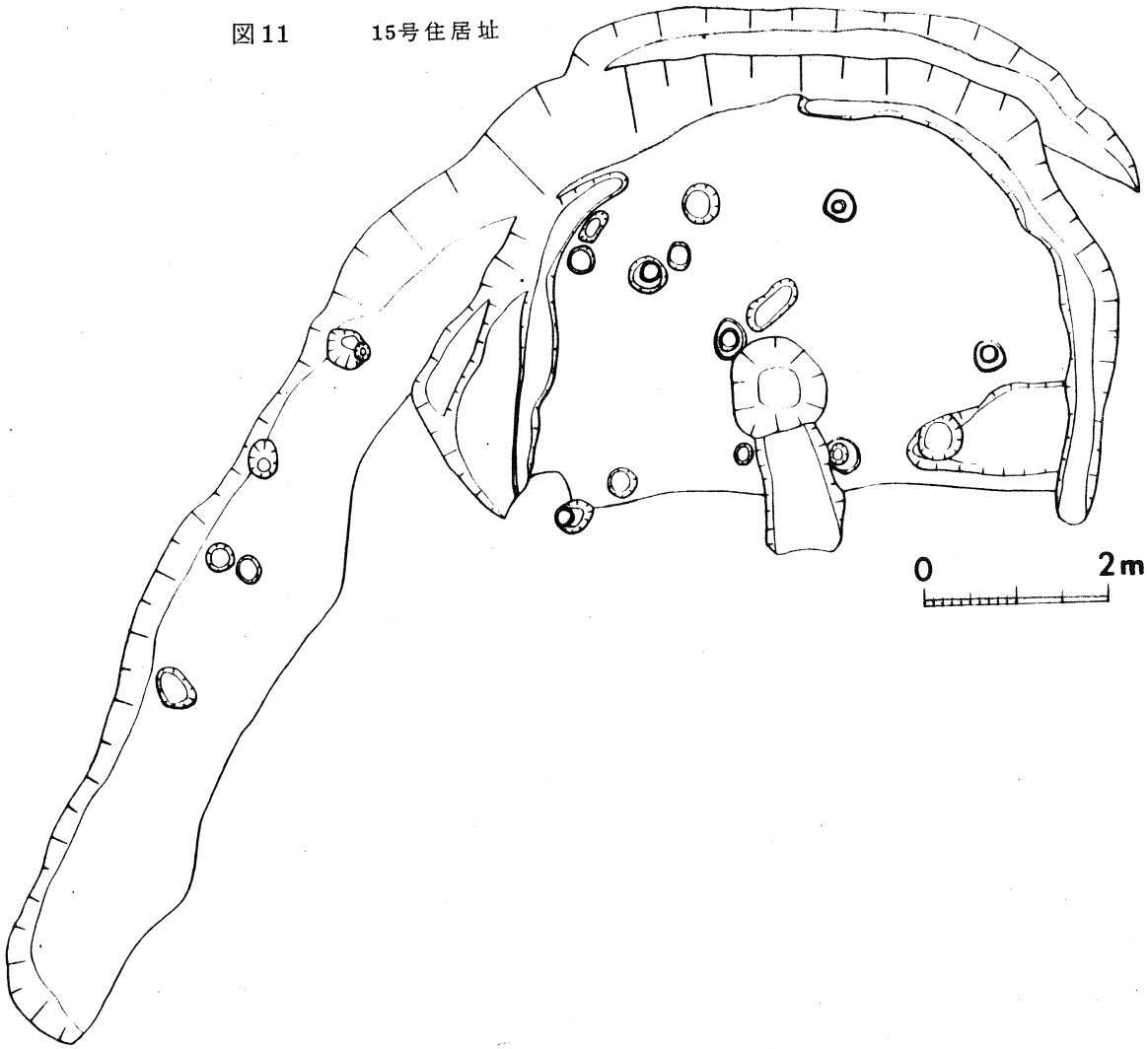
図10　5号住居址



東斜面　15号住居址

15号住居址は，径7.5ｍでほぼ円形に近いと推定されます．中央に炉跡と思われる土壙があり，その埋土は炭化物の堆積がみられました．柱穴から6本柱の構造であったと思われます．また，斜面上方には，幅約30cmの平坦面を削り出した段状の部分があり，この住居址の構造と何らかの関係があったと思われます．この15号住居址の南に，住居址に続くかたちで5号地山切込み遺構があり，住居址に付帯する施設と考えられます．

図11　　15号住居址



16号住居址

16 号住居址は，今回調査した住居址のうち唯一尾根上に存在するものです．尾根の傾斜が変換し，やや平坦になる所にあり，その上方は 6 号地山切込み遺構と接しています．流失が著しく全体の規模を知ることは困難ですが，径 6.5 m のほぼ円形と推定できます．

b) 地山切込み遺構
(SX01～06)

住居址とほぼ同様の形状で検出され，等高線に沿って斜面をＬ字状断面に掘り込んだ遺構です．これらのつくり出された平坦面からは，柱穴が検出されなかったり，長さ１０ｍ以上も掘り込んだものがあり，住居址とは認め難いものを地山切込み遺構としました．２号の遺構は１１号住居址と共有し，５号の遺構は１５号住居址の付帯施設と思われます．４号地山切込み遺構は，幅１～1.5ｍ，長さ１3.5ｍで，斜面上方に向かって幅約２ｍの溝状の掘込みが延び，底面は階段状を呈しています．

c) 土器棺墓
(ST01～02)

小児用と考えられる土器棺墓が２基，１６号住居址から南へ下る斜面で検出されました．１号土器棺と２号土器棺は，直行する形で置かれていました．どちらも，長さ約１ｍ，幅0.6ｍの不整円形の墓壙に，壷を横にねかせた状態に埋められていました．壷の口縁付近には蓋につかわれた土器が重なり合うような状態で検出されました．

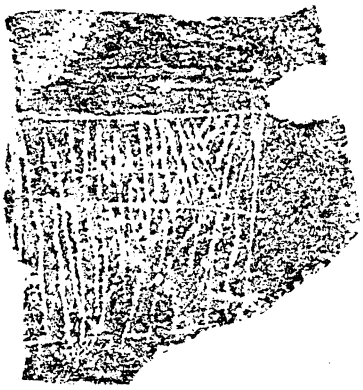


図12　1号土器棺に描かれた原始絵画

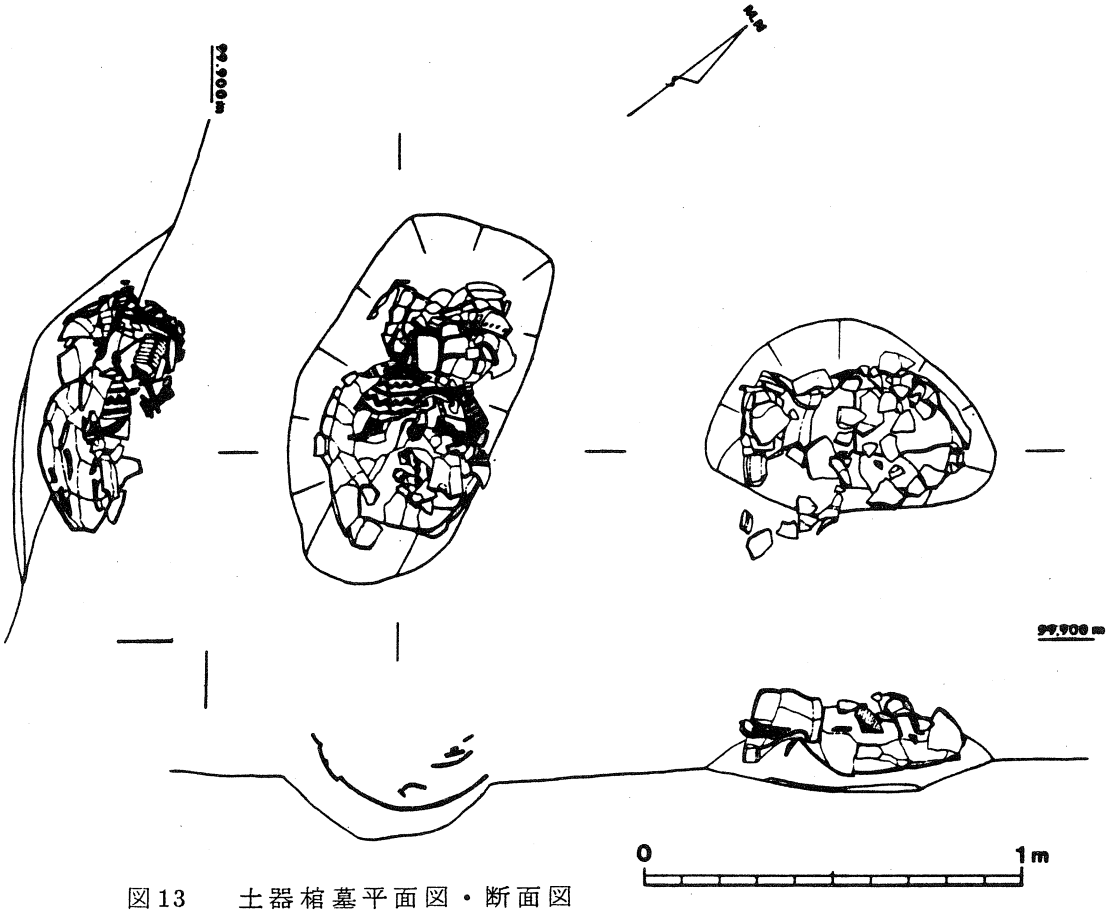


図13　土器棺墓平面図・断面図

d）　土壙，ピット

検出された土壙やピットの多くは尾根上平坦面にあります．１１号土壙を除き，ほとんどが炭化物や焼土がみられました．

B　遺　物

多量の弥生土器と石器類が出土しています．弥生土器は，弥生時代中期後半のもので，壷・甕・高坏・器台や台付のものがあります．

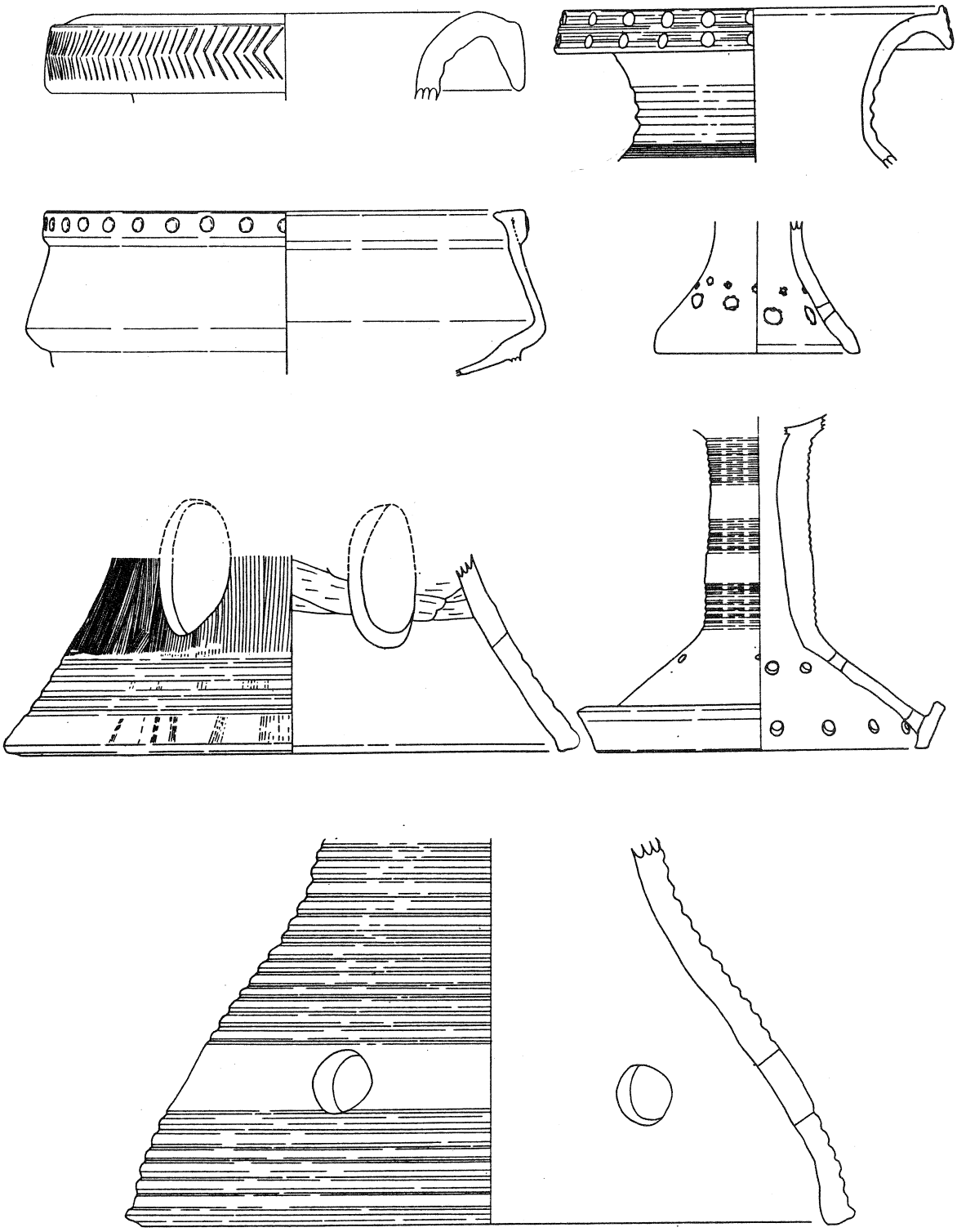


図14　包含層出土遺物

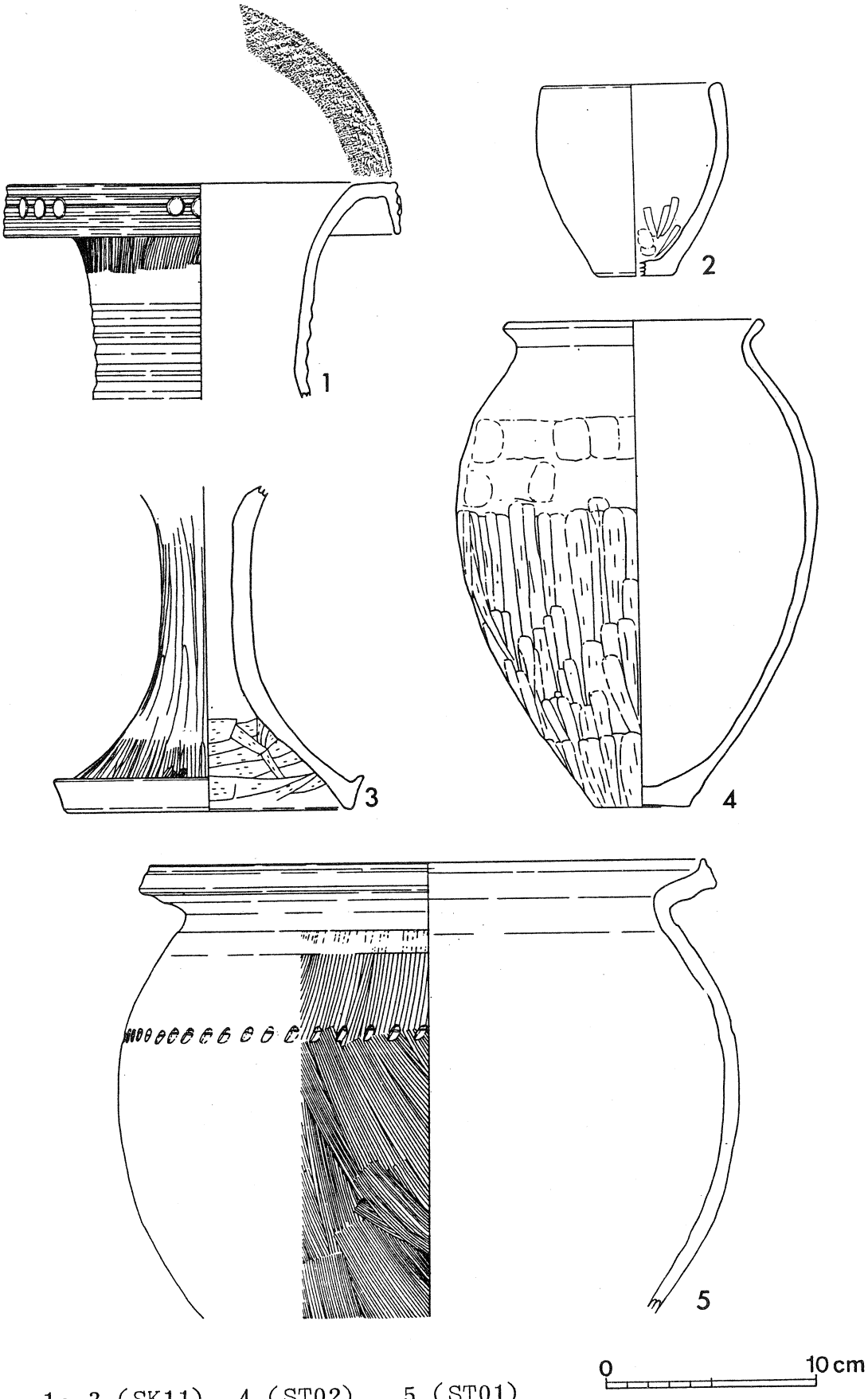


図15　1～3（SK11）　4（ST02）　5（ST01）

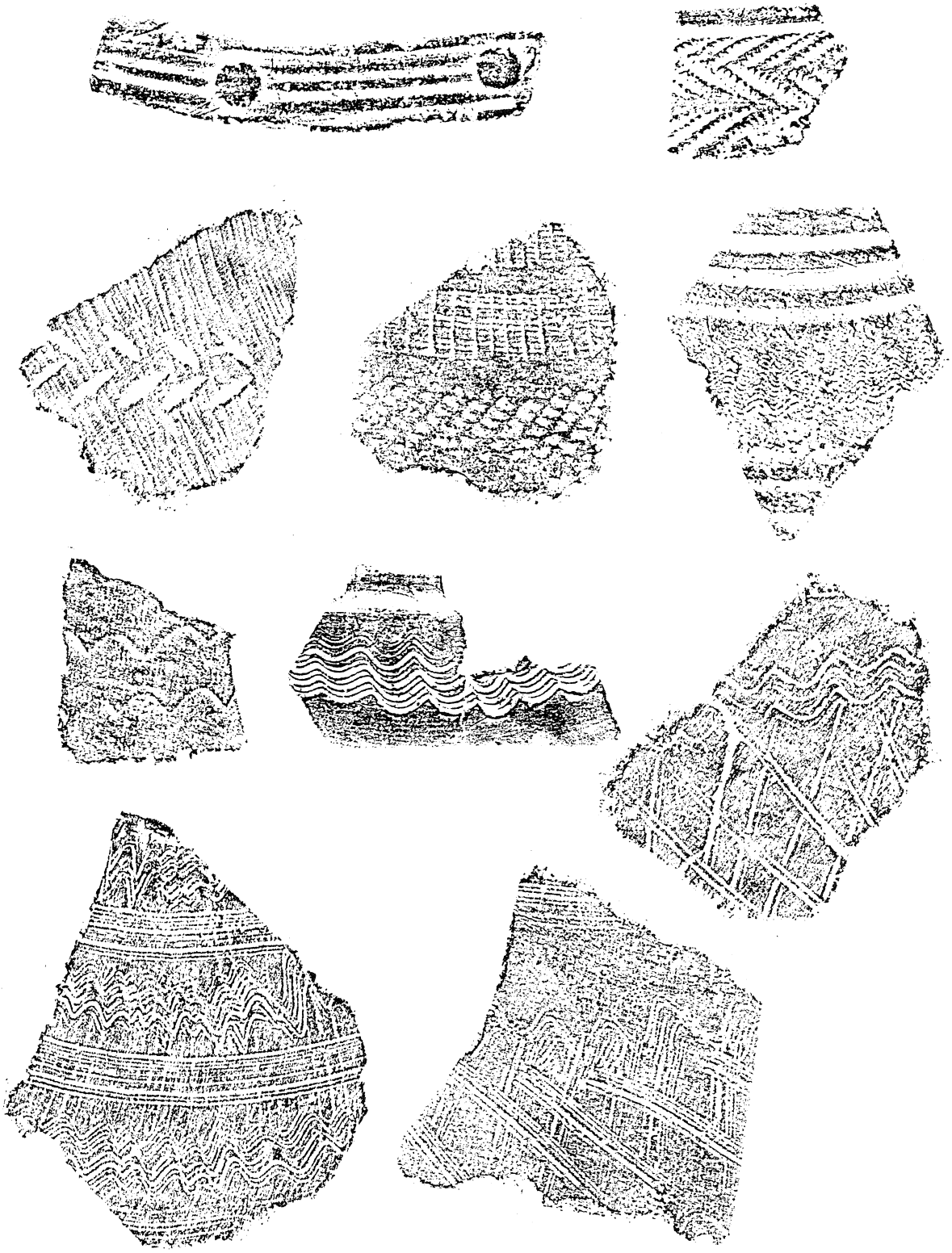


図16　出土土器拓影

石器類には，磨製石剣，石鏃（うち磨製1点），石斧，砥石，石錘などがあります．磨製石剣のうち1点は，残存長15.5cm，幅3.2cmで，基部付近に孔を2つあけているものです．他に破片が3点出土しています．

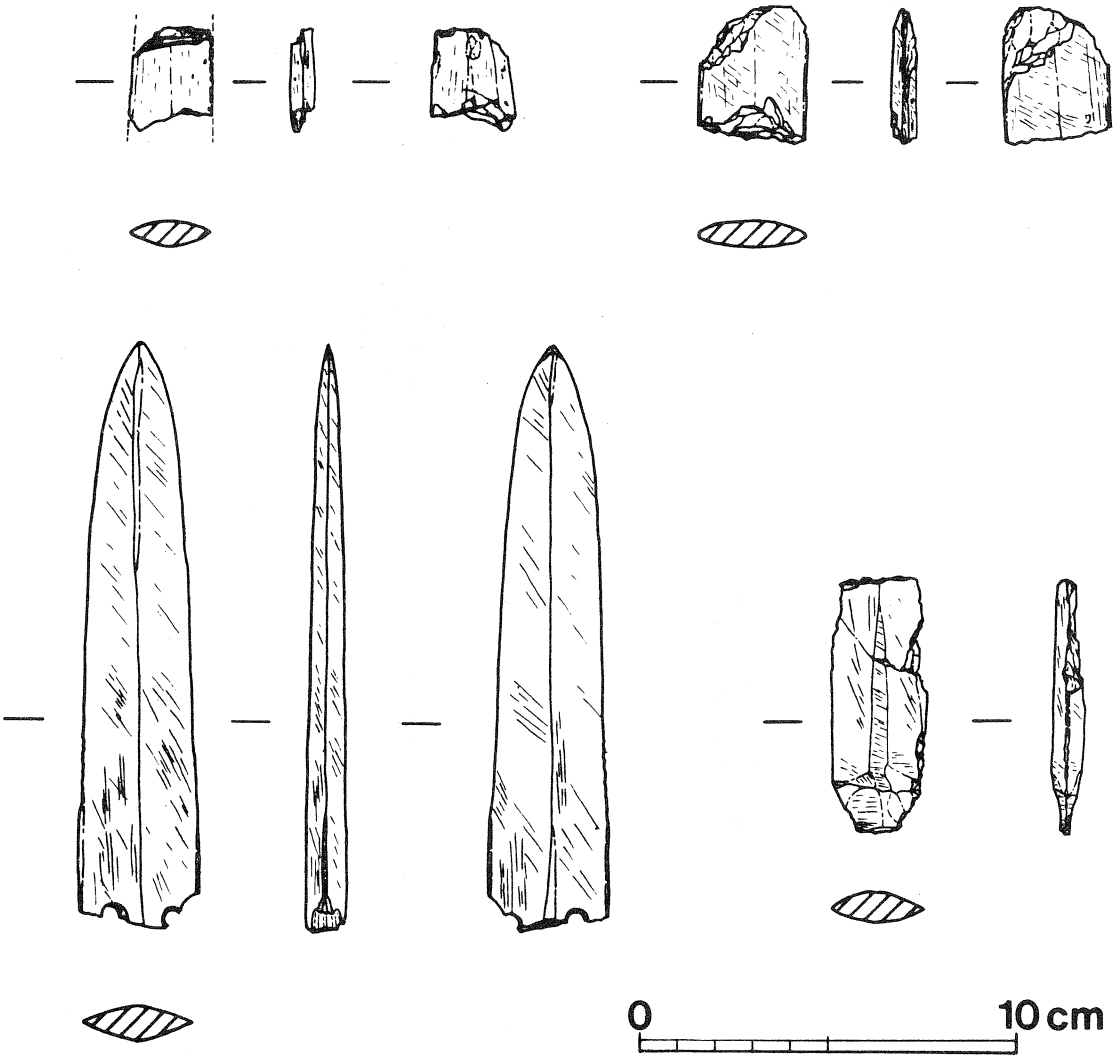


図17　磨製石剣

図18　池上 口ノ池遺跡 出土
磨製石剣

神戸市内での磨製石剣の出土は，これまで養田中の池遺跡（西区），伯母野山遺跡（灘区），鏑射山（北区），垂水区出土といわれるもの，青谷遺跡（西区），池上口ノ池遺跡（西区）があり，前4者は銅剣型石剣とよばれるものです．頭高山遺跡と同形のものは，梅谷遺跡（神崎郡夢前町）や福井県高浜町小和田出土例などいくつか知られています．

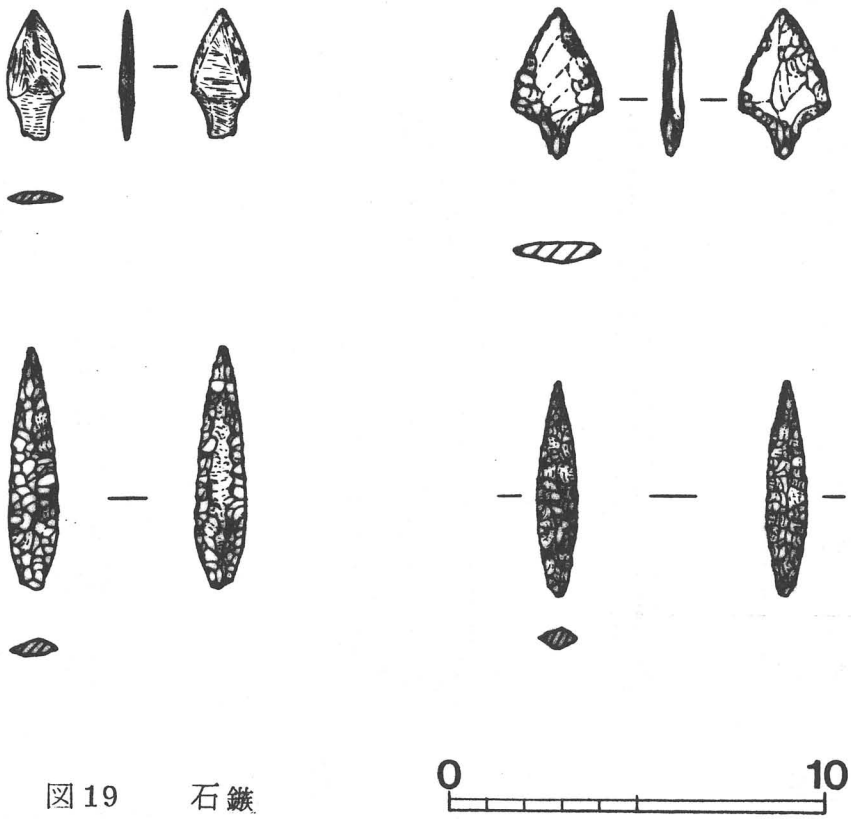


図19　石鏃

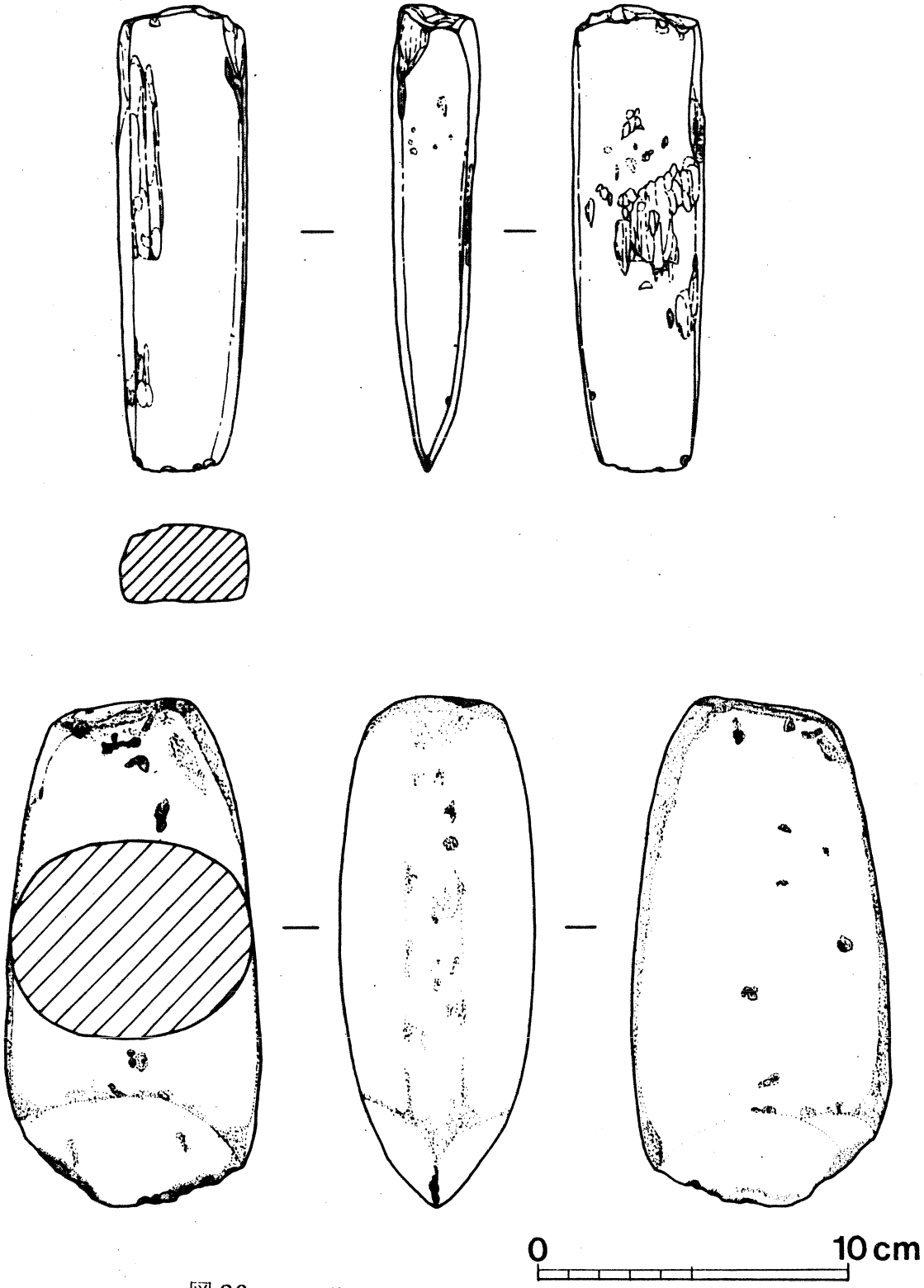


図 20　石斧

4　まとめ

頭高山遺跡は，弥生時代中期後半の集落址で比高４０～６５ｍの斜面と尾根上に営まれています．このように，展望のよい山頂・山腹や斜面の急な高い洪積台地上に住居を営み，水田経営や日常の居住に不便な地形のところに立地する集落を高地性集落とよんでいます．このような集落は，軍事的防衛の性格をもつ集落であるとの考えが一般です．ムラからクニへ移りかわる時代の緊張の現われととらえられます．同時期に周辺でも平地の集落が存在することから，今後両者の関係を明らかにしていかなければなりません．今回，弥生時代の遺跡として伊川の最奥に位置する頭高山遺跡の一部を調査し集落の存在が明らかになったことは，伊川流域及び明石平野の歴史を考えるうえで重要です．

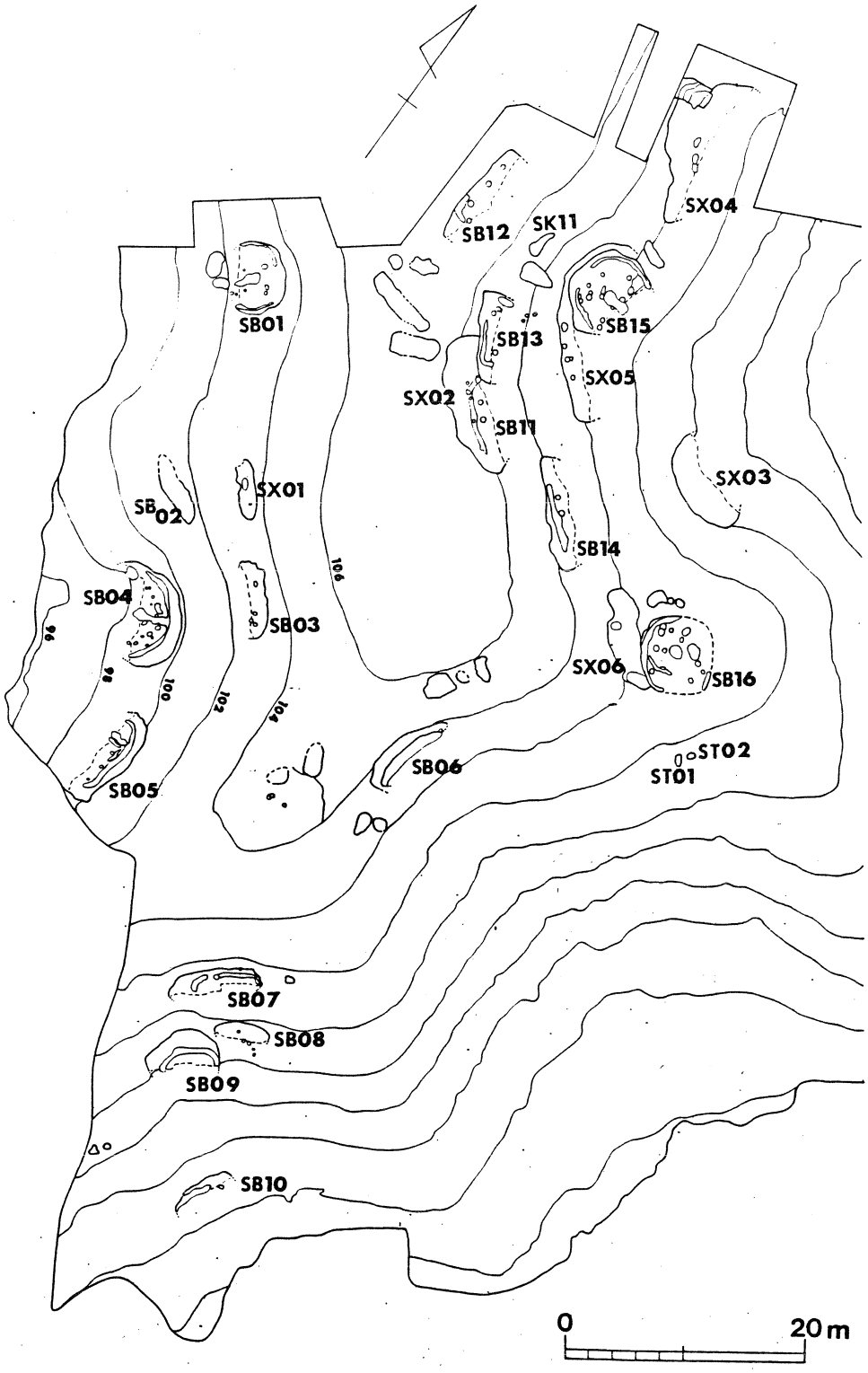

SB12
SK11
SX04
SB01
SB13
SB15
SX05
SX02
SB11
SX03
SX01
SB02
SB14
SB04
SB03
SX06
SB16
SB05
SB06
ST02
ST01
SB07
SB08
SB09
SB10
0
20m

図21　遺構全体図

神楽町遺跡現地説明会資料

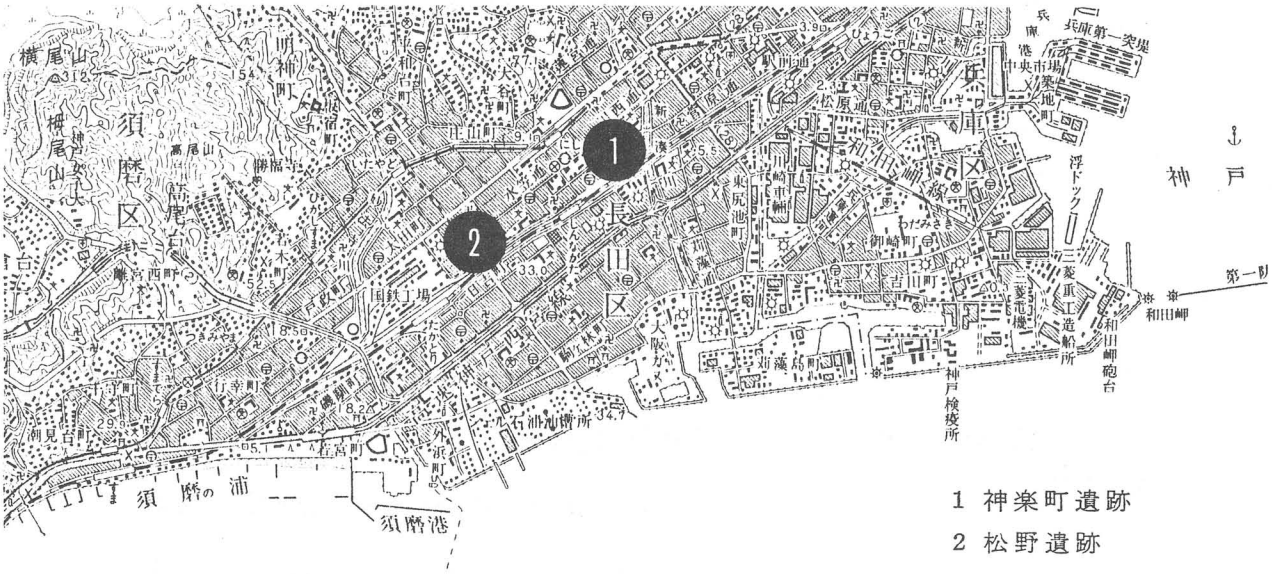
昭和58年10月9日

神戸市教育委員会

神楽町遺跡の調査については、神戸市民生局、神戸市立神楽保育所のご協力を得ました。

1　はじめに

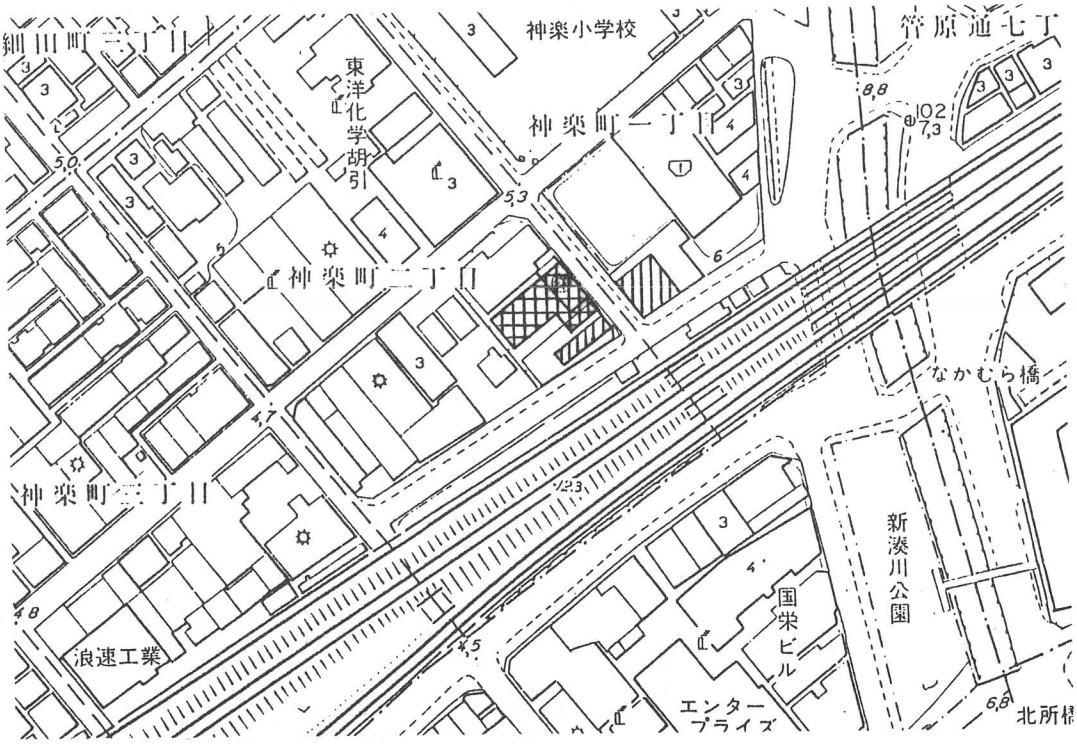
神楽（かぐら）町遺跡は，昭和５４年に神戸市高速鉄道（地下鉄）建設工事に先立って行った遺跡確認調査で発見された遺跡です．この地下鉄建設工事に伴う発掘調査では，弥生時代後期の溝１条・平安時代中期の溝１条・古墳時代後期と平安時代中期の土壙・ピットが多数見つかりました．また，平安時代の溝からは，須恵器・土師器・黒色土器のほか，緑釉（りょくゆう）陶器・灰釉（かいゆう）陶器などの施釉陶器が出土し，これら土器の中に数点「東福」の墨書のあるものがありました．



1　神楽町遺跡
2　松野遺跡

神楽町遺跡の位置　　1：50000

今回の発掘調査は，神戸市立神楽保育所の改築工事に先立って約４００㎡を対象に昭和５８年８月２２日より実施しています．前述の地下鉄建設工事に伴う調査地の北側隣地にあたります．



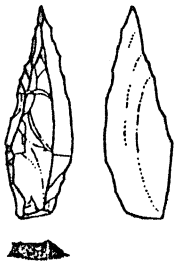
調査地の位置　１：２５００

２　位置と歴史的環境

神楽町遺跡は，神戸市長田区神楽町２丁目にあり，新湊川（苅藻川）の下流西岸に位置しています．このあたりは，苅藻川・妙法寺川によって形成された扇状地で，調査地は標高約４ｍ（遺構面）の低地に立地しています．

神楽町遺跡周辺は，はやくから市街地化され遺跡の存在については，最近まで空白の地域でした．ここ数年，地下鉄建設や再開発などの工事に伴い，遺跡の発見が相つぎ，発掘調査が行われるようになりました．その結果，市街地の地下にも遺跡が残されていることがわかってきました．

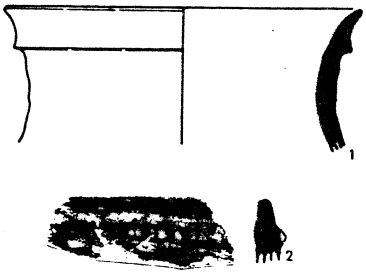
旧石器時代



ナイフ形石器
サヌカイト製
全長　5.6cm

神楽町遺跡周辺で人が住みはじめたのは，今から約2万年前の後期旧石器時代まで遡ると思われます．会下山遺跡で，丘陵上からナイフ型石器とよばれる石器が採集されています．しかし，まだ生活の痕を示す遺跡は見つかっていません．

縄文時代



五番町遺跡出土の土器

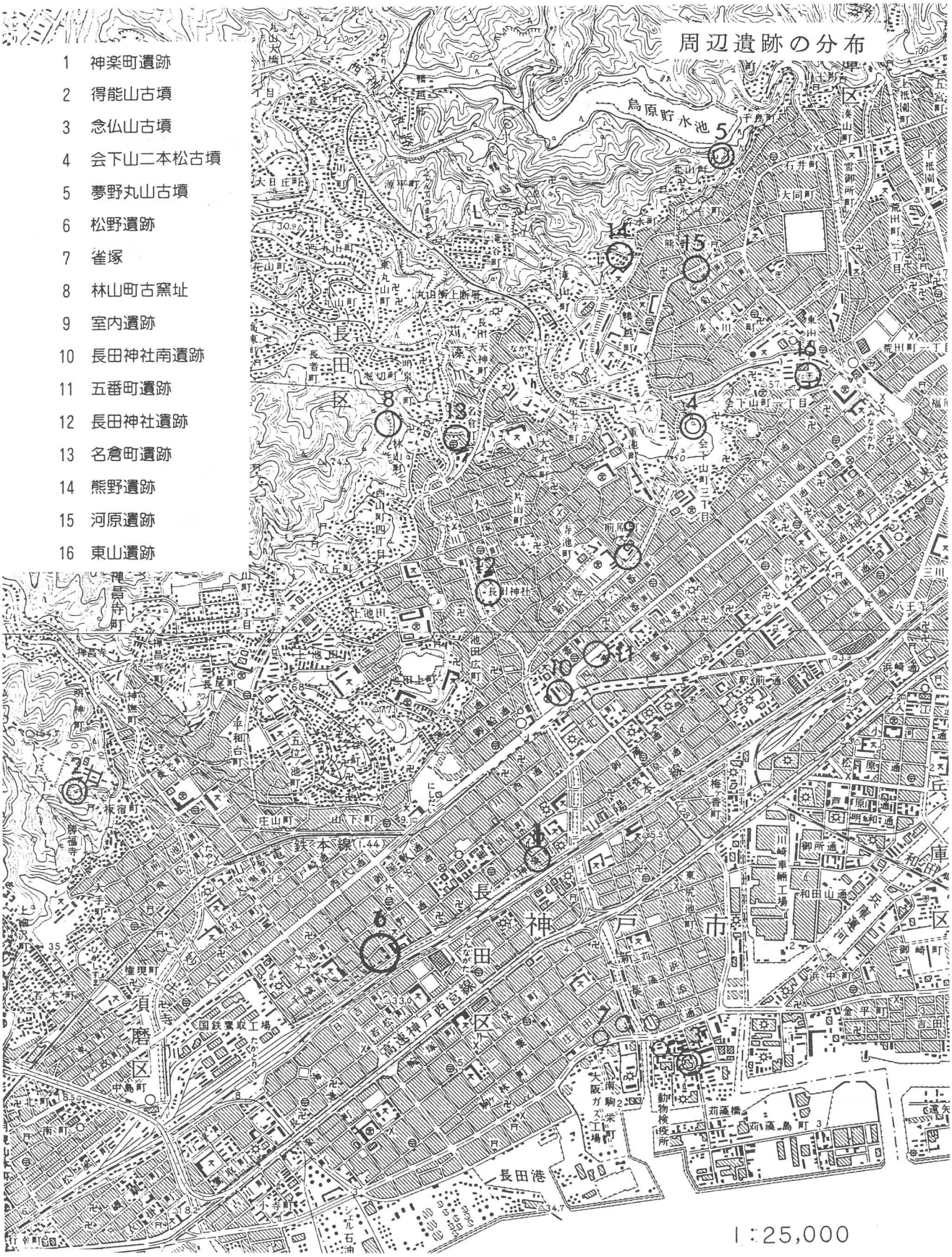
縄文時代に入ると周辺にもいくつかの遺跡が発見されています．須磨区の境川遺跡（早期），長田区では名倉遺跡（中期），五番町遺跡（晩期）などがあります．

弥生時代

弥生時代になると，遺跡も増し，中小河川沿いに集落が出現してきます．稲作の始まりとされる前期の遺跡として，楠・荒田町遺跡（兵庫区・中央区）があり，松野遺跡（長田区）でも前期の木葉文（このはもん）のある土器が出土しています．

周辺遺跡の分布

1　神楽町遺跡
2　得能山古墳
3　念仏山古墳
4　会下山二本松古墳
5　夢野丸山古墳
6　松野遺跡
7　雀塚
8　林山町古窯址
9　室内遺跡
10　長田神社南遺跡
11　五番町遺跡
12　長田神社遺跡
13　名倉町遺跡
14　熊野遺跡
15　河原遺跡
16　東山遺跡



中期になると，丘陵や段丘上にも集落が出現します．兵庫区の東山遺跡・河原遺跡・熊野遺跡・会下山一本松遺跡などがあります．

後期の遺跡としては，長田神社境内遺跡・長田神社南遺跡・松野遺跡・神楽町遺跡などが知られ，苅藻川の中・下流域の沖積地に点在するようになります．

古墳時代

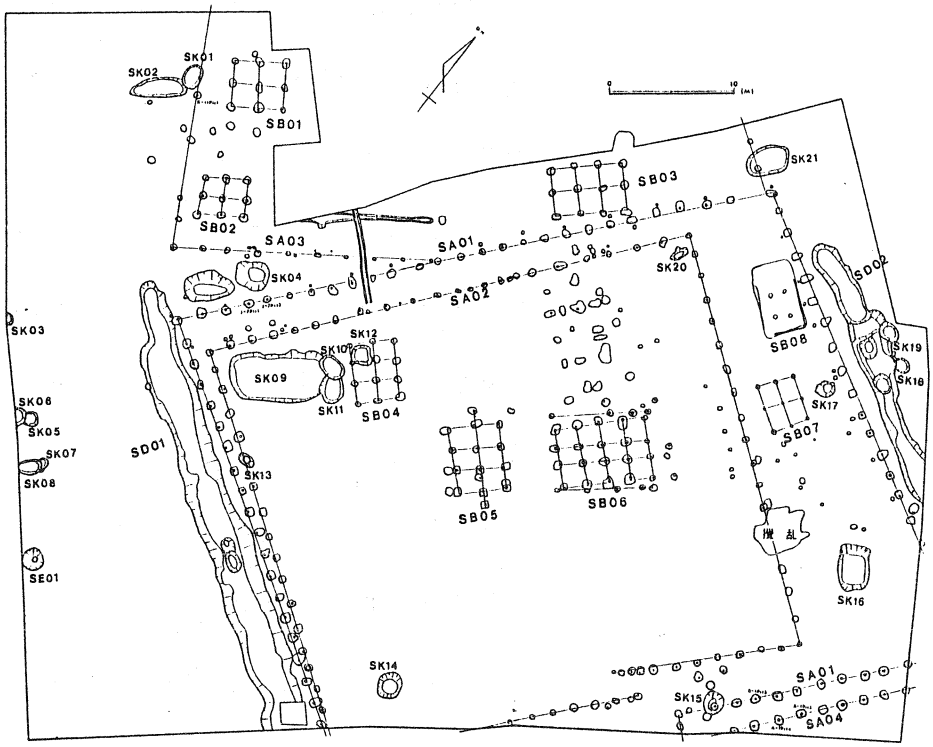
古墳時代になると，得能山古墳，会下山二本松古墳，夢野丸山古墳などが築かれます．これらの古墳は円墳で，古墳時代前期末から中期初頭のものと考えられています．

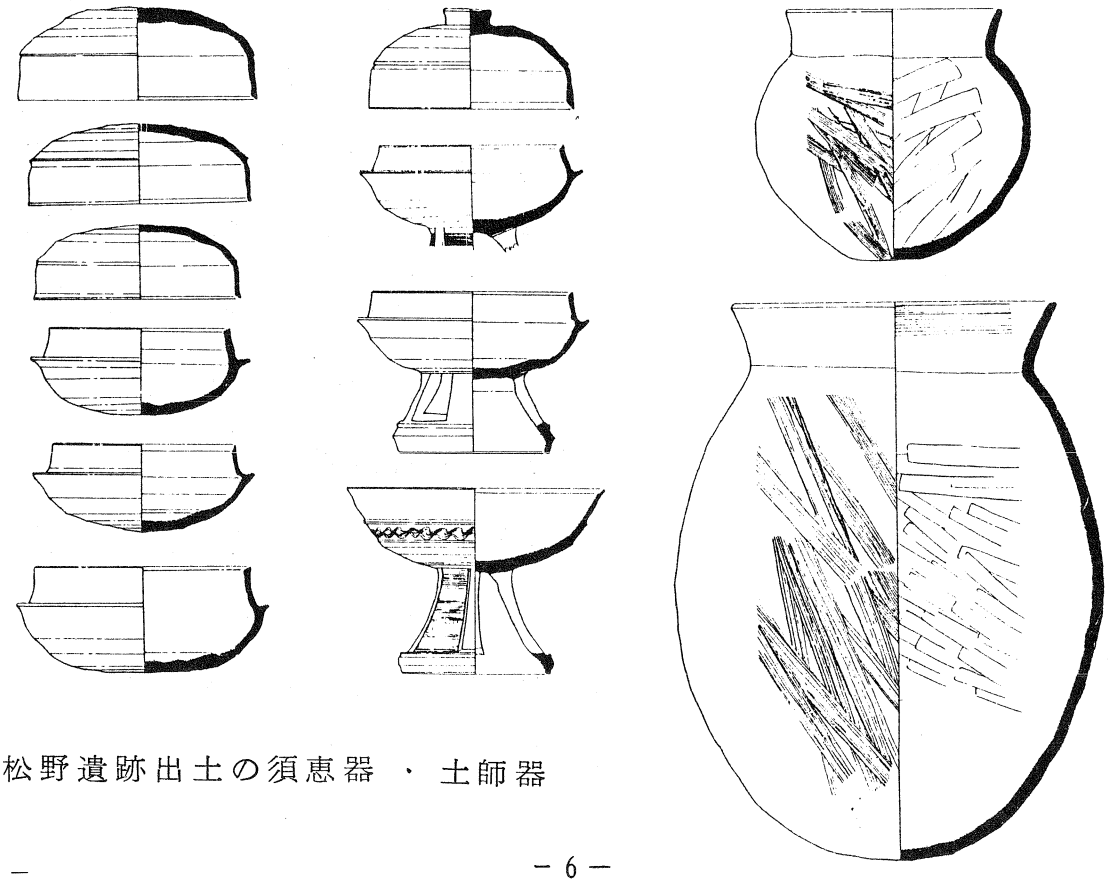
中期になると，苅藻川の右岸に前方後円墳と推定される念仏山古墳が出現します．

後期では，観音山や西尻池付近に古墳が造られました．しかし，これら古墳は，今日では失われ，その姿を見ることはできません．

この時代の生活址は，まだ多くは知られておらず，古墳時代後期の神楽町遺跡と松野遺跡などが知られているにすぎません．松野遺跡は，溝を伴う柵列で囲まれた中に掘立柱建物７棟がならび，豪族の屋敷跡ではないかと推定されています．

松野遺跡平面図





松野遺跡出土の須恵器・土師器

奈良・平安時代

房王寺出土の瓦

奈良時代，平安時代では，神楽町遺跡でこの時代の遺物が出土し，平安時代の遺構が検出されています．

また，室内小学校付近では，瓦が出土しており，寺院，あるいは官衙（かんが）が存在したのではないかと考えられています．

3　調査の概要

今回の調査で発見された遺構は，弥生時代の溝1条，古墳時代後期の竪穴住居址5棟，溝2条，土壙9か所，ピットが多く発見されました．また，平安時代の溝1条，ピット多数が検出されました．

溝2
（SD02）

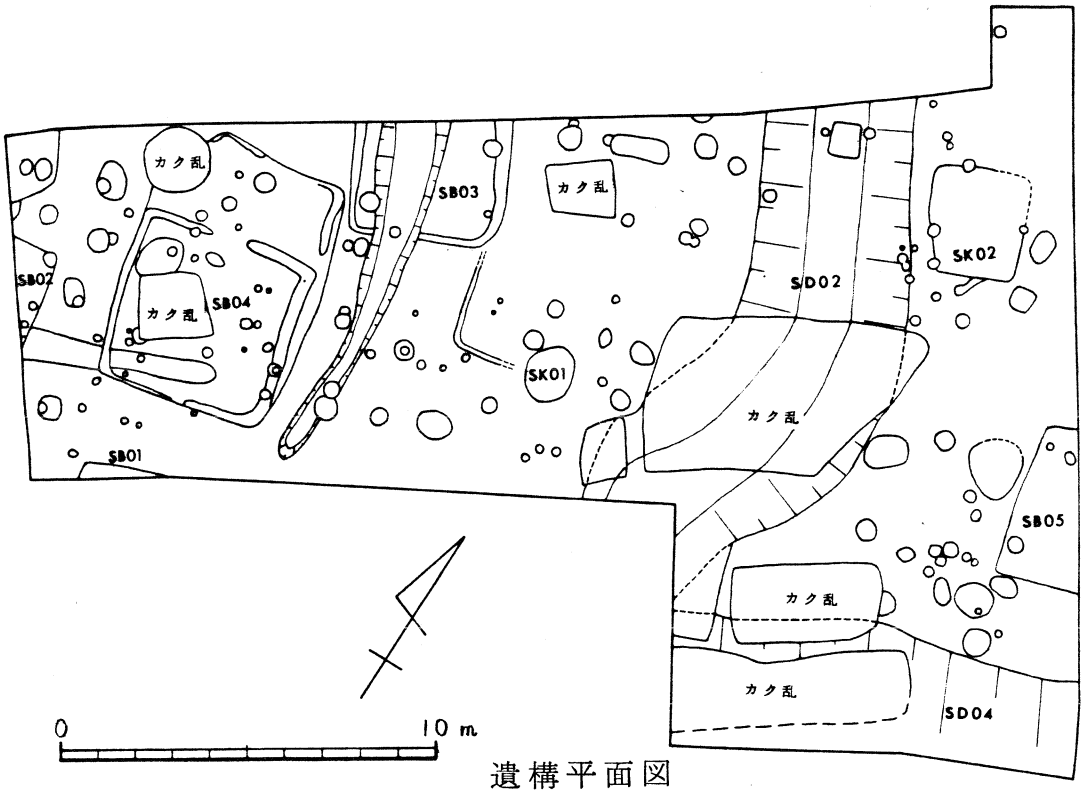
溝2は，幅4ｍ，深さ0.9ｍで，埋土の堆積状況から自然流路と考えられます．この溝内より，弥生時代中期後半から後期にかけての土器が出土しました．

1号住居址
（SB01）
2号住居址
（SB02）

1号住居址と2号住居址は，その規模を知ることができませんが，方形のものと思われ，2号住居址の壁面にそっては，柱跡と思われるピットが検出されました．

3号住居址
（SB03）

3号住居址は，一辺4.2ｍの方形と推定され，周壁溝をもちます．溝1やピットによって切られています．



遺構平面図

4号住居址
（SB04）

4号住居址は，4.8 m×7 mの長方形を呈しています．周壁溝は南側で方形に周り，もとは方形の住居址を北側に拡張したものと考えています．

5号住居址
（SB05）

5号住居址は，一辺4 mの方形と推定されます．周壁溝は検出されず，設けていないと思われます．

これら1号～5号の竪穴住居址は，いずれも古墳時代後期（5世紀末～6世紀初頭）のものです．

土壙1
（SK01）

土壙1は，径1.3 mのほぼ円形で，深さ0.6 mのすり鉢状を呈しています．埋土より，

須恵器・土師器のほか，製塩土器，獣歯が出土しました．

土壙2
（SK02）

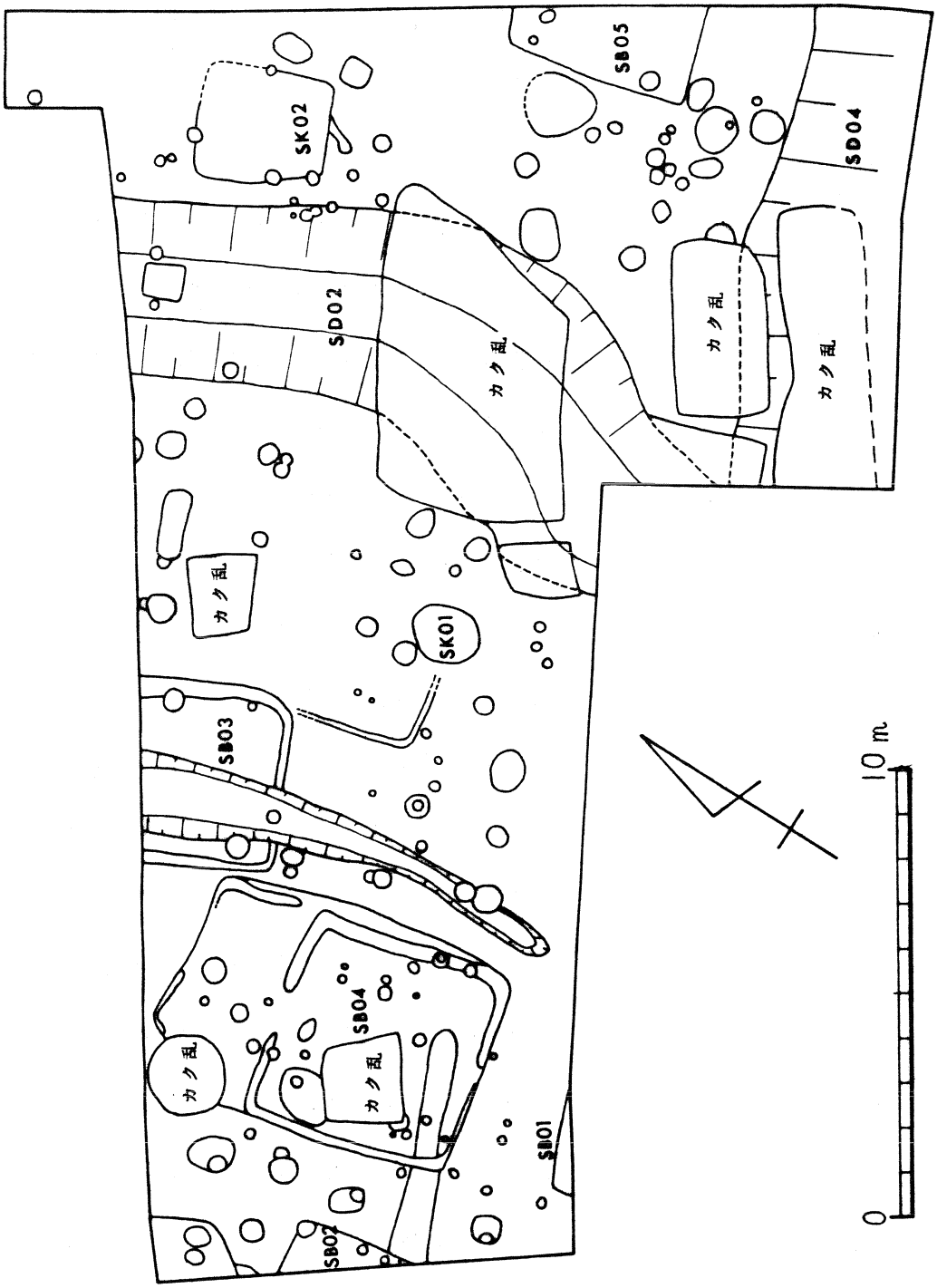
土壙2は，幅約2.5ｍ長さ3ｍの長方形の土壙で北側辺の中央付近に炭と焼土が検出されました．土壙内より須恵器の甕・坏蓋・土師器甕などの土器のほか，獣骨に10数条の線刻をしたものが出土しています．

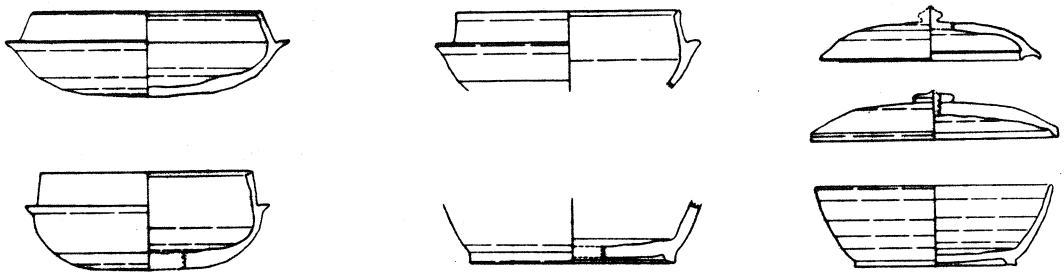
土壙1・2とも古墳時代後期（5世紀末～6世紀初頭）のものです．

溝4
（SD04）

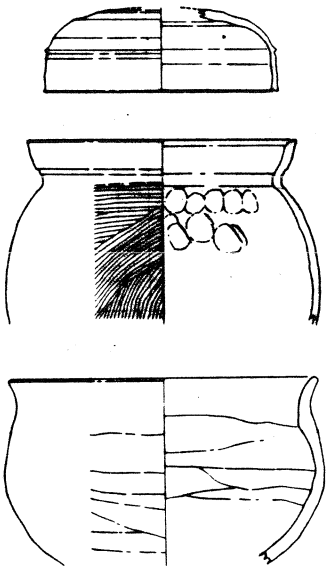
溝4は，幅4ｍ以上，深さ0.8ｍで調査地の南端で検出されました．溝内から出土した遺物は，須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器で古墳時代後期から平安時代のものです．

このほか，住居址状の落込み1か所，土壙，ピットが多数検出されましたが，性格については不明です．ピットのうち柱穴と思われるものが数か所ありますが，建物址としての確認は今後の整理・検討を要します．これらのピットの時期は，出土遺物のほとんどが細片のため不詳ですが，古墳時代後期（5世紀末～7世紀）のものと，平安時代（10世紀～11世紀）のものがあるようです．

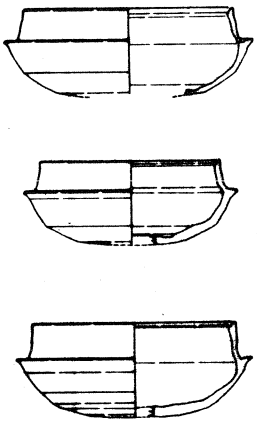

SK02
SB05
SD04
SD02
カク乱
カク乱
カク乱
カク乱
SK01
SB03
SB04
カク乱
カク乱
SB01
SB02
10 m
0



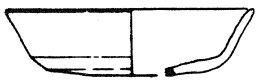
包含層出土須恵器



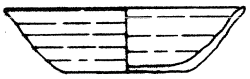
SB04出土須恵器・土師器



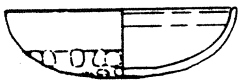
SB05出土須恵器



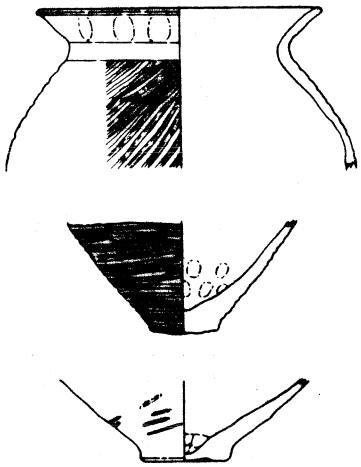
ピット49出土土師器

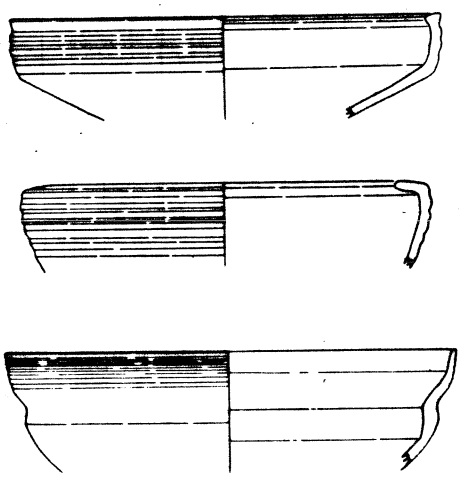


SD04出土土師器



ピット13出土土師器





SD02出土弥生土器

S＝1／4

4　まとめ

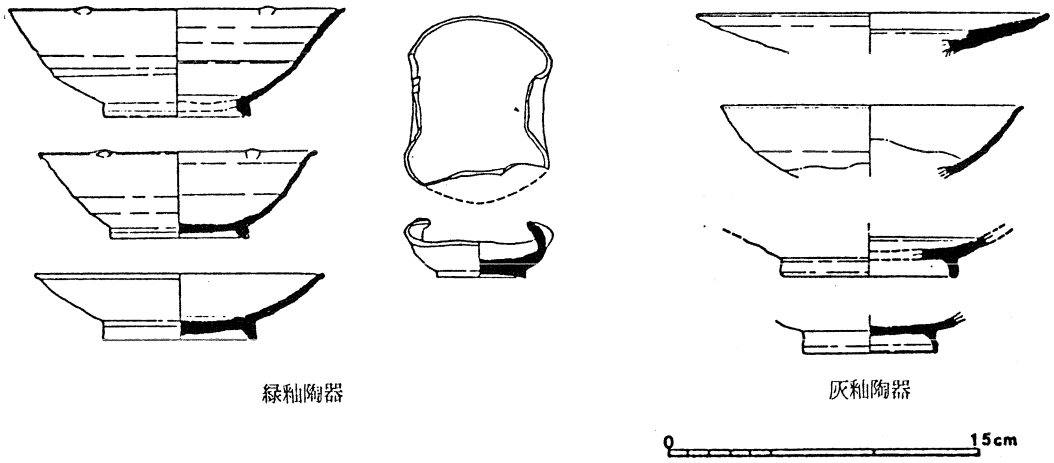
神楽町遺跡の調査は，前回（昭和５６年度地下鉄建設に伴う）の調査と合わせても，わずか５０ｍ四方あまりの範囲内のものですが，この地域は弥生時代から平安時代に至る原始・古代の人々が生活を営んでいたことが明らかになってきました．

今回，竪穴住居址がまとまって検出されたことにより，古墳時代後期の集落の存在が確認されました．神楽町遺跡から西方約１kmにある松野遺跡は，同時代の豪族の屋敷跡と推定される遺構が見つかっており，この神楽町遺跡の集落との結びつきが考えられます．この付近一帯が当時の「村」を形成していたと推察されます．

また，弥生時代についても，溝は自然流路と考えられますが，出土する遺物の量が多いことから，この付近に集落が存在していたことは確実です．

前回調査の際，平安時代の溝より施釉陶器や墨書（ぼくしょ）土器などの特殊な遺物が出土したことから，調査当初，この時代の建物址等の発見に期待がかけられていましたが，溝，ピット以外明確な遺構の検出は見られませんでした．

遺跡については，出土遺物から，寺院や官衙などの存在が十分考えられますが，今後の周辺の調査を待たなければなりません．



昭和56年度調査出土の施釉陶器

市街地では，遺跡の様相やその存在すら明らかでないのが現状です．しかし，こうしたなかでここ数年来，市街地での新たな遺跡の発見，調査が行われるようになりました．今回の調査からも，この付近では原始から古代にわたり連綿と人々の生活のあとが残されていることがわかりました．今も周辺では地下に遺跡が眠っていることでしょう．

郡　家　遺　跡

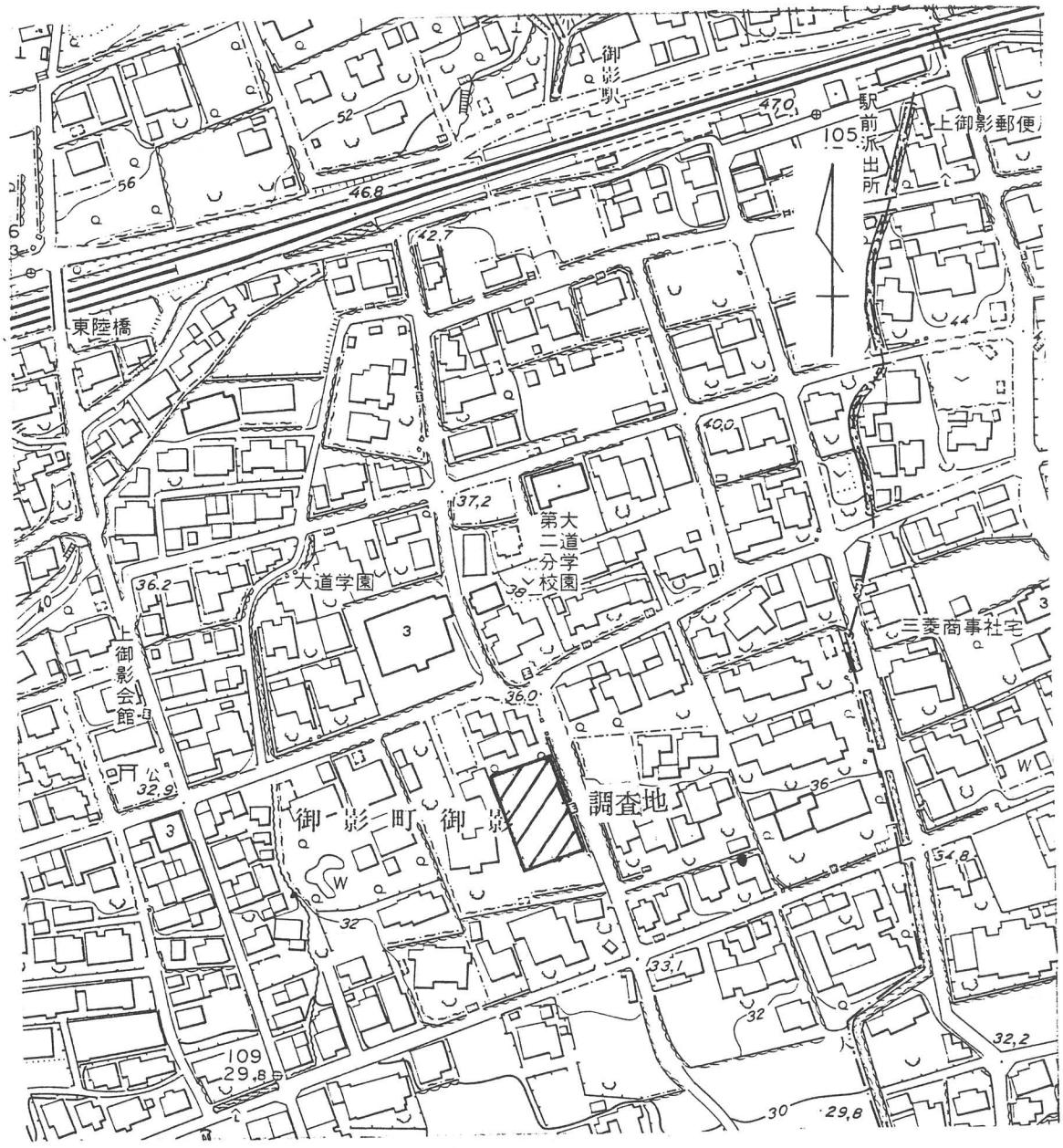
昭和58年度第4次調査現地説明会資料

昭和59年2月11日

神戸市教育委員会

位置及び立地

群家遺跡は神戸市東灘区御影町を中心に，東は住吉川，西は石屋川，北は阪急電車神戸線，南は国道２号線までは拡がるであろうと考えられる遺跡です．今回の調査対象となった地点は東灘区御影町御影字城の前に所在しており，天神川によって形成された扇状地上に立地しています．



調査地の位置　１：２５００

1

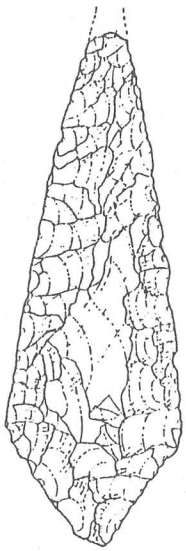
周辺の遺跡

灘・東灘区周辺で古墳以外の遺跡はあまり多く知られていませんでしたが，最近の発掘調査件数の増加によって徐々に明らかになりはじめています．

〈旧石器時代・縄文時代〉　旧石器時代では灘区滝ノ奥遺跡（昭和56年度調査）で有茎尖頭器が発見されています．また灘区篠原遺跡では，縄文時代晩期から平安時代の遺物が発見され戦前に報告されています。

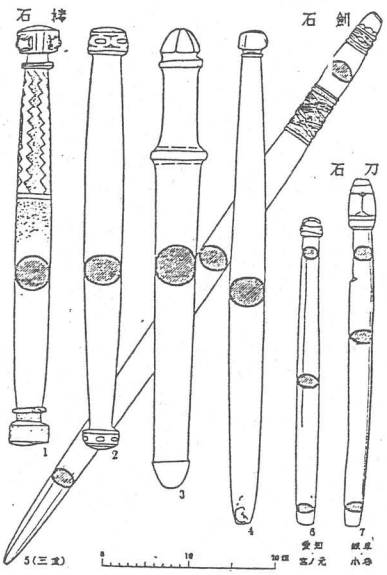
昭和58年に調査された地点からは縄文時代晩期の遮光器土偶をはじめ，東日本的な様相をもつ土器や石棒などが出土し，文化の交流が行われていたのではないかと注目されました．

その他近接する芦屋市内では，朝日ヶ丘遺跡（旧石器時代），山芦屋遺跡（縄文時代前期）などが知られています．



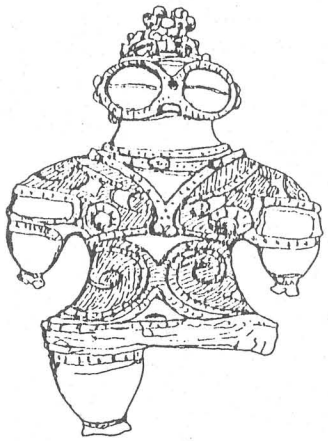
有茎尖頭器

滝ノ奥遺跡出土



石棒

小林行雄著「日本考古学概説」より



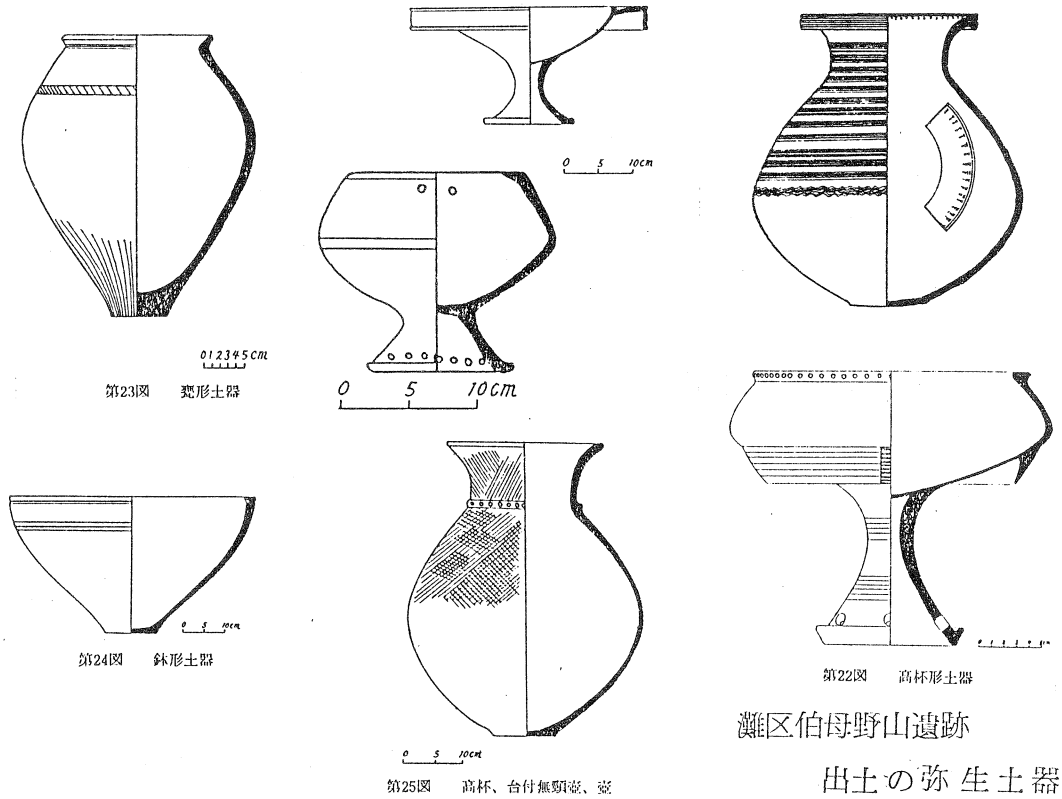
遮光器土偶

青森　亀岡遺跡出土

〈弥生時代〉　弥生時代になると，この周辺でかなり多くの遺跡が知られています．六甲山南麓の数多くの扇状地及びその末端から沖積地にかけて，灘区篠原遺跡（今年度調査），東灘区郡家遺跡・深江遺跡，本山中町遺跡（今年度調査），森北町遺跡（昭和５７年度調査）などが知られ，特に本山中町遺跡では自然河道から大量の弥生土器等が出土しています．

一方，六甲山系山腹や尾根上には，灘区伯母野山遺跡，桜ケ丘遺跡Ｂ地点（昭和５３年度調査），東灘区金鳥山遺跡，芦屋市会下山遺跡など，中期の高地性集落が点在しています．

また，銅鐸１４口，銅戈７本が出土した桜ケ丘遺跡をはじめ，渦ケ森，保久良神社，神戸女子薬大構内，森北町からも銅鐸や銅戈が出土しています．



第23図　甕形土器

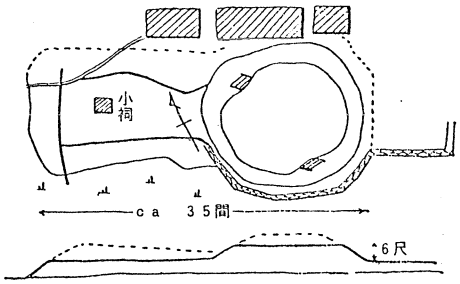
第24図　鉢形土器

第25図　高杯、台付無頸壺、壺

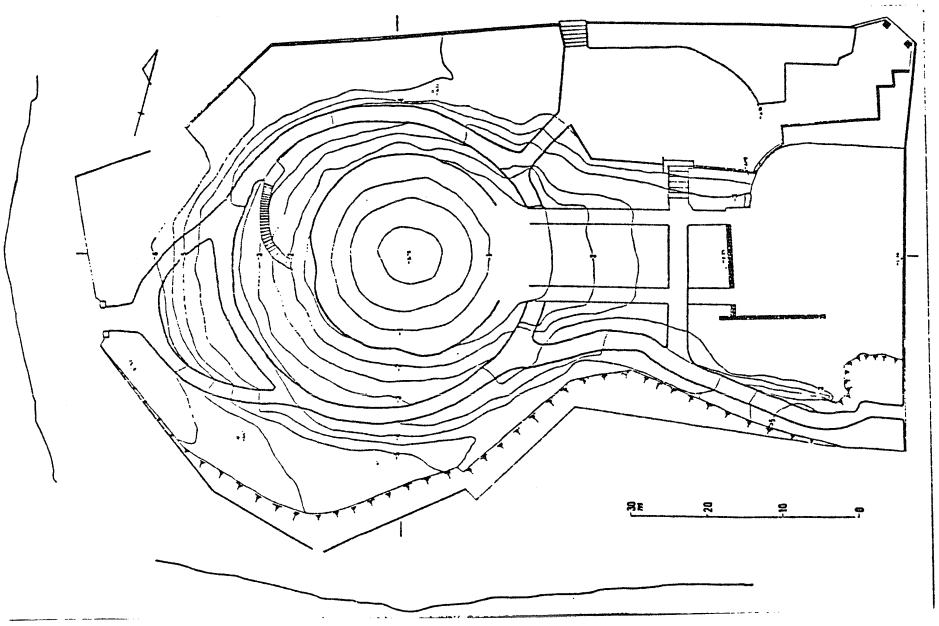
第22図　高杯形土器

灘区伯母野山遺跡
出土の弥生土器
「伯母野山弥生遺跡」より

〈古墳時代〉　周辺でよく知られている古墳には，史跡処女塚古墳（昭和５４，５６，５７年度調査），東求女塚古墳（昭和５７年度調査），西求女塚古墳，坊ケ塚古墳，ヘボソ塚古墳，芦屋市親王塚古墳などの大型墳が知られています．処女塚古墳は発掘調査の結果，従来前方後円墳と考えられていたのが，実は前方後方墳であると判明しました．また完全に消滅したと思われていた東求女塚古墳では，地中に墳丘基部と葺石，周湟が残存していることがわかっています．



ヘボソ塚

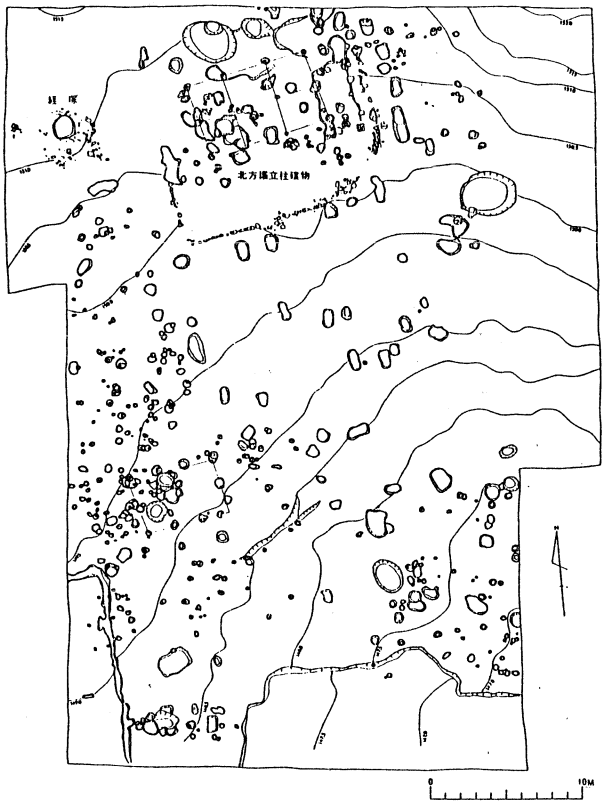


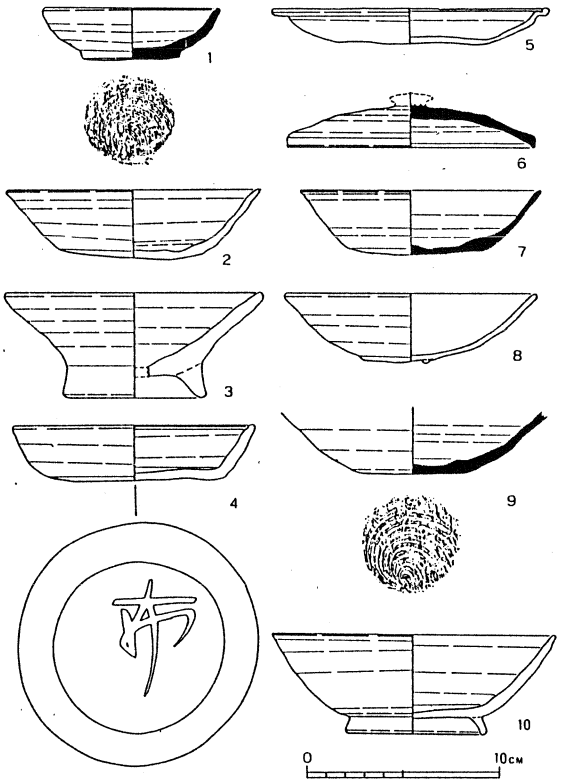
西求女塚

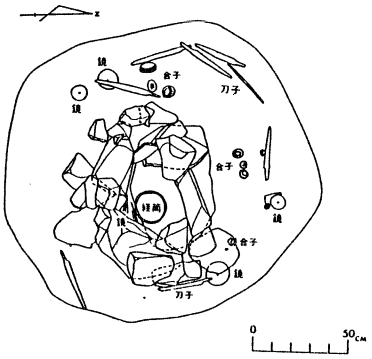
「兵庫の前方後円墳」より

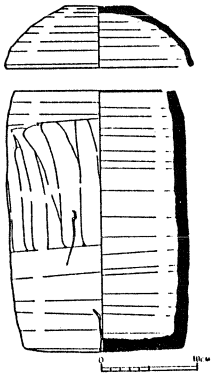
〈歴史時代〉　歴史時代以降の遺跡では，灘区滝ノ奥遺跡があげられます．平安時代中期（１０世紀後半）から鎌倉時代（１３世紀前半）にかけての遺跡で，経塚，掘立柱建物址，火葬墓址等が検出されました．特に１２世紀中頃に造営されたと思われる経塚からは和鏡１１面，中国製青白磁・白磁合子６点など大量の埋納品が出土しました．

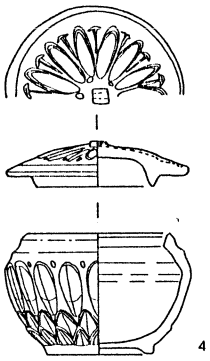
滝ノ奥遺跡検出遺構・遺物

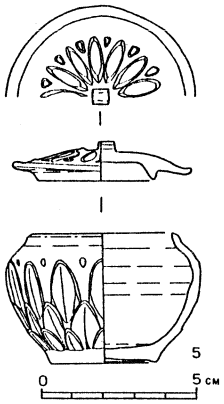












5

郡家遺跡内における発掘調査

(1) 大蔵地区 ― 郡華幼稚園の南側の地点で，昭和５４年度に発掘調査を実施しました．その結果，

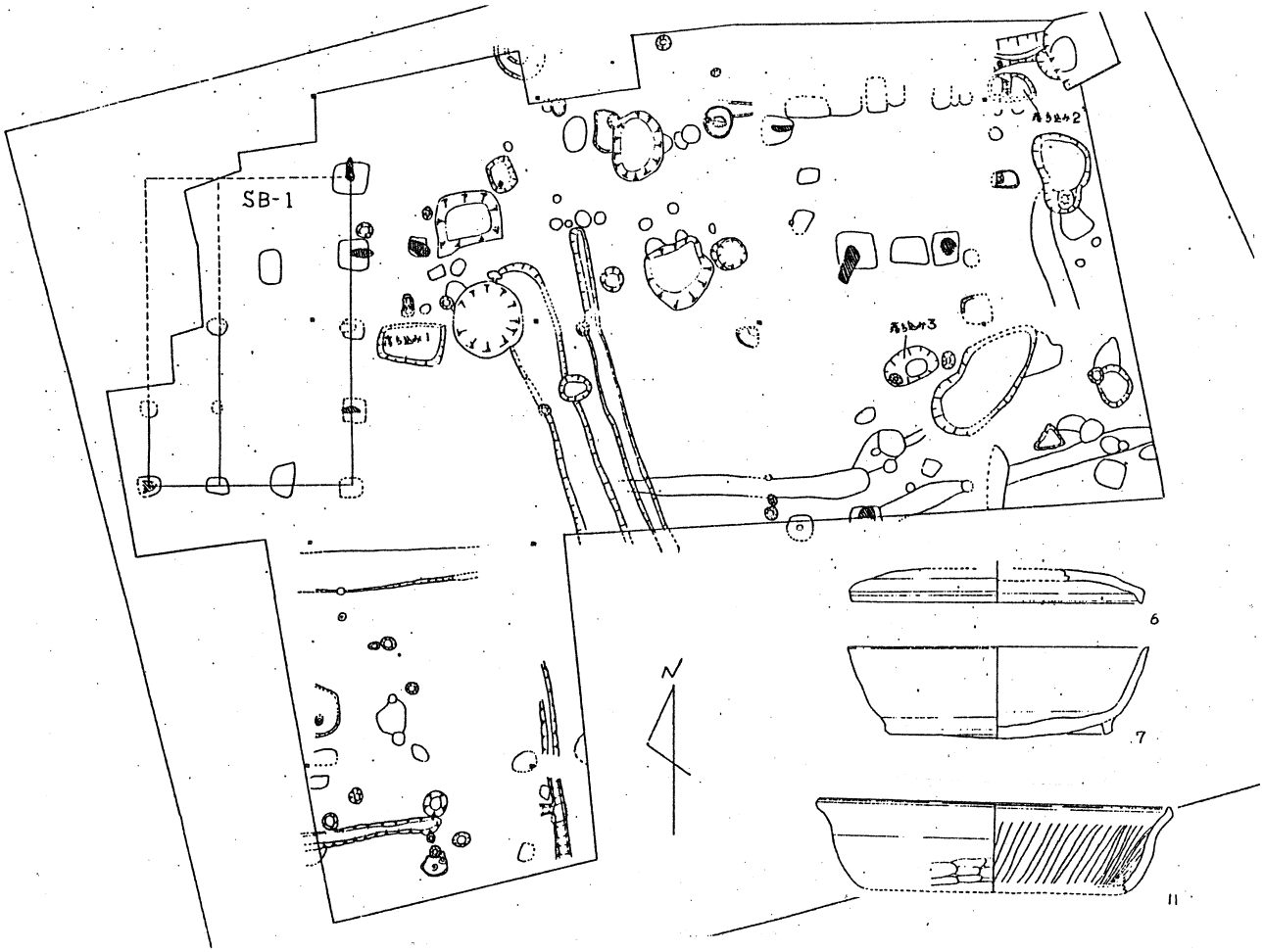
① 中世と考えられる暗渠や落込みなど

② 奈良時代から平安時代の掘立柱建物址など

③ 弥生時代中期後半から後期にかけての遺構

が検出されました．

郡家遺跡大蔵地区検出遺構・遺物



6

(2) 御影中町４丁目１番 ― 東灘警察署の西隣の地点で昭和５６年度に発掘調査を実施した結果，

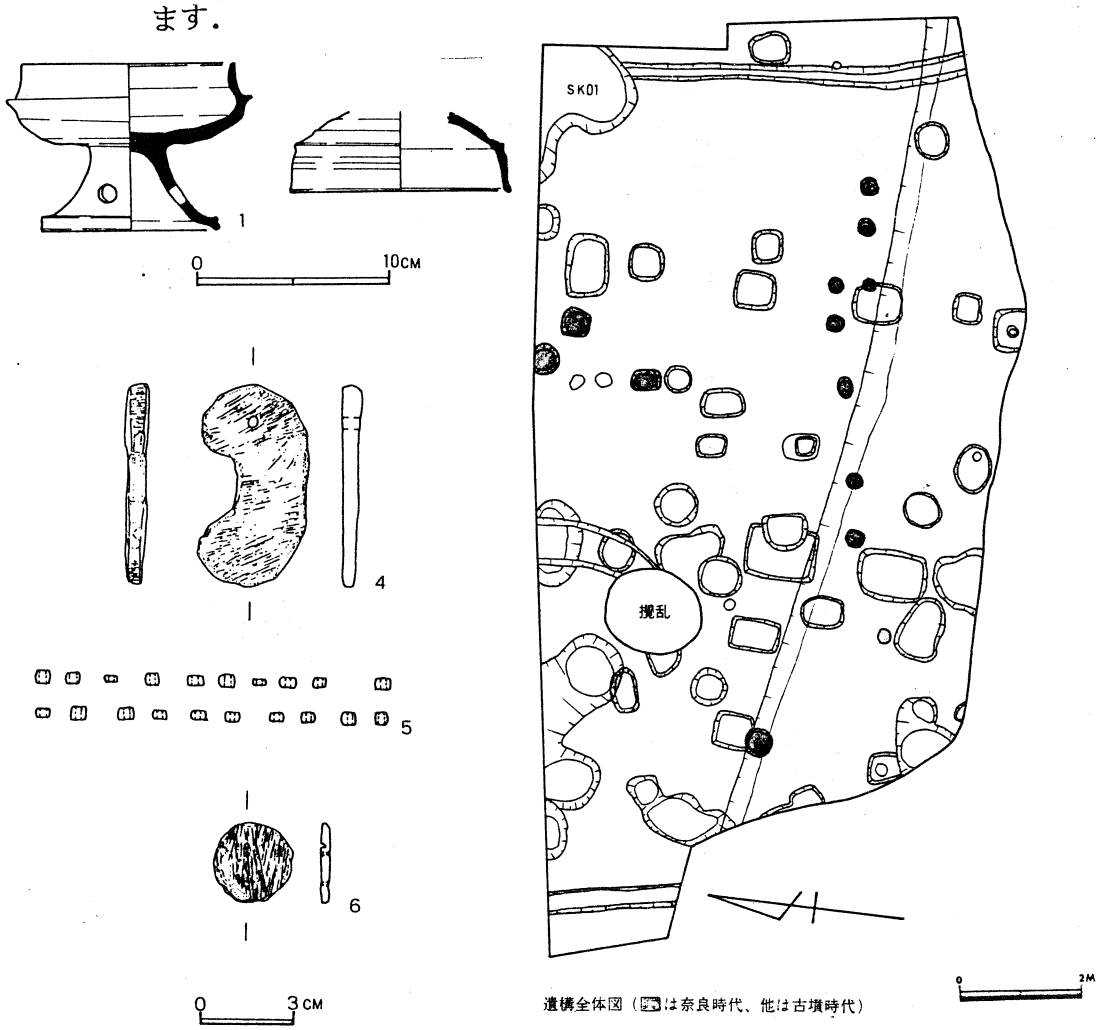
① 鎌倉時代の水田址と柱穴・溝

② 奈良時代から平安時代の柱穴群

③ 古墳時代後期（６世紀後半）の柱穴群と祭祀遺構

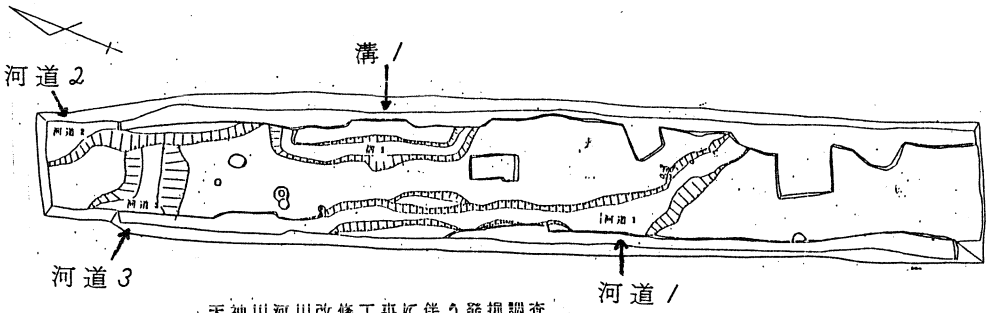
④ 古墳時代後期（５世紀後半）の土 壙

が検出されました．第２面は，大蔵地区と同様に柱穴群が検出され，出土遺物中に緑釉陶器片の出土もみられることから延喜式（９２７年完成）に記載されている「菟原郡」の郡衙跡ではないかと推定しています．



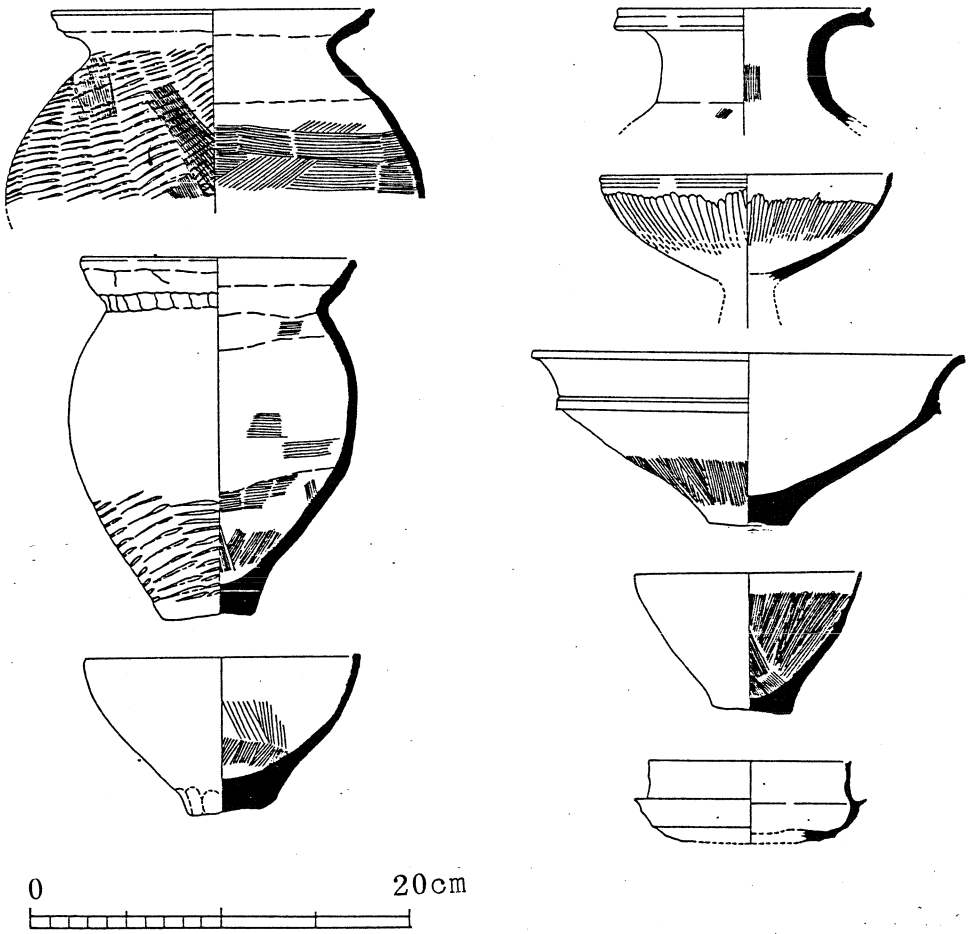
遺構全体図（▨は奈良時代、他は古墳時代）

(3) 天神川改修に伴う城の前・篠ケ坪地区 ― 今回の調査地点の南で前年度発掘調査が実施されました．その多くは自然河道でしたが，鎌倉時代（土壙）古墳時代後期・弥生時代後期末（方形周溝状遺構）の遺構・遺物が発見されました．



天神川河川改修工事に伴う発掘調査

遺構平面図



天神川河川改修工事に伴う発掘調査 出土遺物

1 大蔵地区　2 御影中町4丁目1番　3 天神川地区

（本文中番号に対応）

調査概要

今回の発掘調査対象面積は約７５０㎡ですが，そのうちの約２割が最近の攪乱を受けています．

検出された遺構はその時期によって４面に分けられます．

① 鎌倉時代中期（１２世紀後半～１３世紀前半）

・掘立柱建物址１（ＳＢ－０１）攪乱のため明確な規模は不明ですが，東西方向２間と考えられます．

・井戸（ＳＥ－０１）　一辺１ｍの方形プランをもっており，深さは1.３ｍです．底は径３０cm程の円形をしており，径１５～３０cm大の円礫を積み上げています．

② 平安時代後期（１１世紀前半）

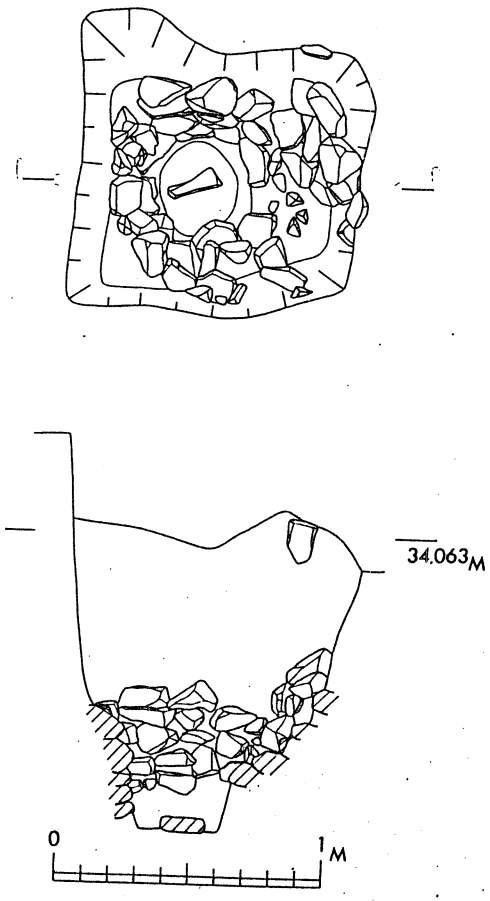
・掘立柱建物址１（ＳＢ－０２）　調査区内で検出された規模は４間（8.８ｍ）×４間（8.５ｍ）で総柱の建物が，まだ西側にも延びる可能性があります．柱穴の掘方は径約４０～５０cm，柱穴は径約２０cmです．

③ 古墳時代後期（５世紀後半）

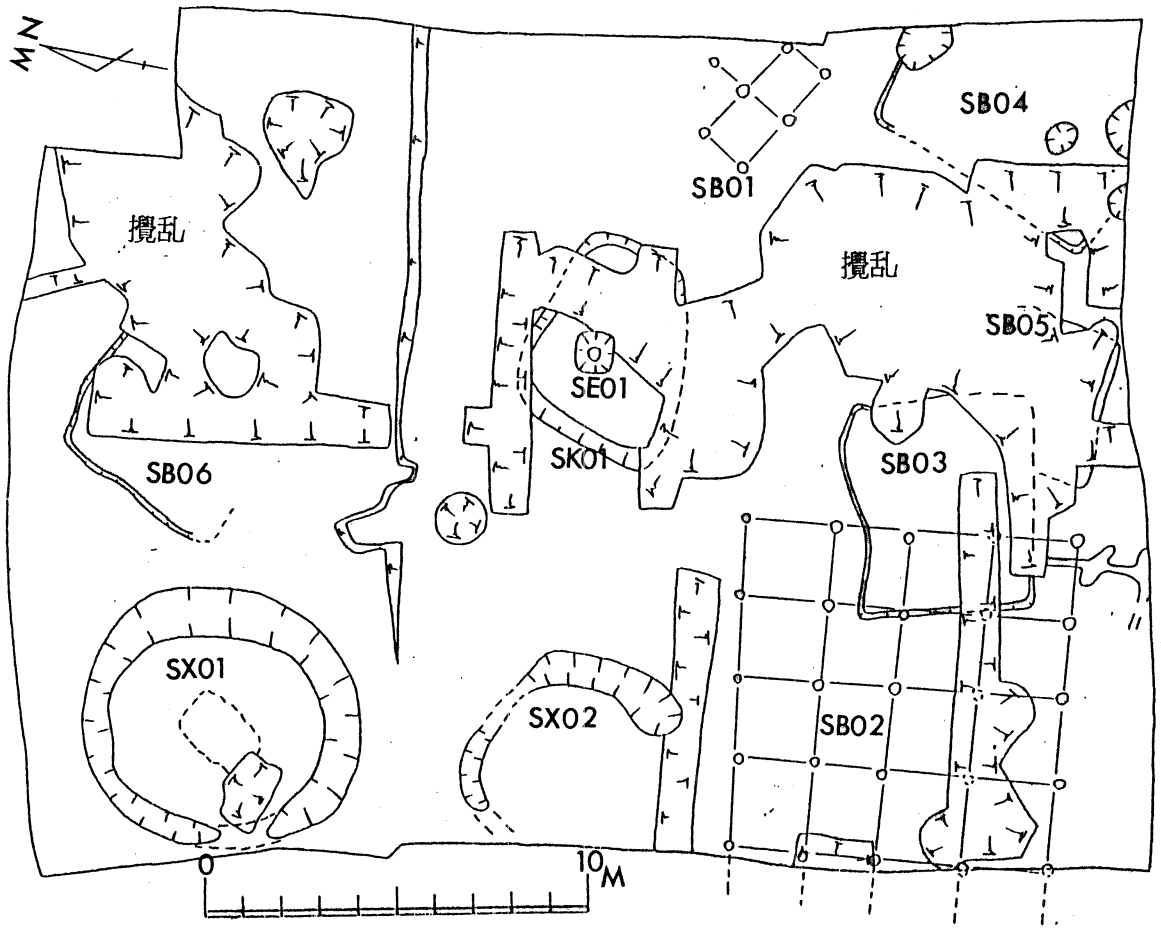
・竪穴住居址４（ＳＢ－０３～０６）

ＳＢ－０３　調査区中央南部分から検出されました．東西5.６ｍ南北4.７ｍの方形住居址です．そのほぼ中央で滑石製紡錘車が出土しています．

ＳＢ－０４　調査区南東端から検出されました．東西方向は調査対象地区外のため規模は不明ですが，南北6.５ｍの方


34.063M
0
1M

井　戸　SE01


N
撹乱
SB01
SB04
撹乱
SB05
SE01
SK01
SB03
SB06
SX01
SX02
SB02
0
10M

平　面　図

形住居址であっただろうと思われます．また，この住居址から滑石の原石が出土していますが，未製品や製作中にできるチップ（小剝片）などは発見されませんので，玉類の工房址とは考えられません．

ＳＢ－０５　ＳＢ－０３に切られた住居址ですが，攪乱のため東西方向が4.0ｍであること以外はわかりませんでした．

ＳＢ－０６　調査区中央北側で検出されましたが，攪乱のため，明確な規模がつかめません．

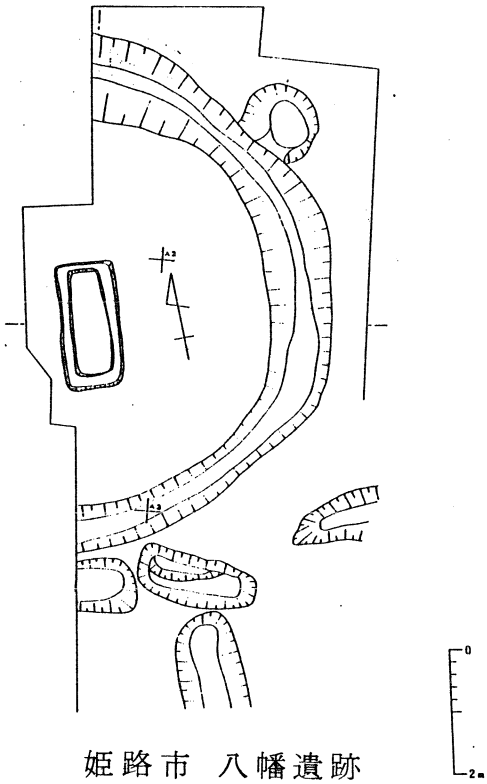
④　弥生時代後期（弥生土器Ｖ様式）

・円形周溝状遺構２

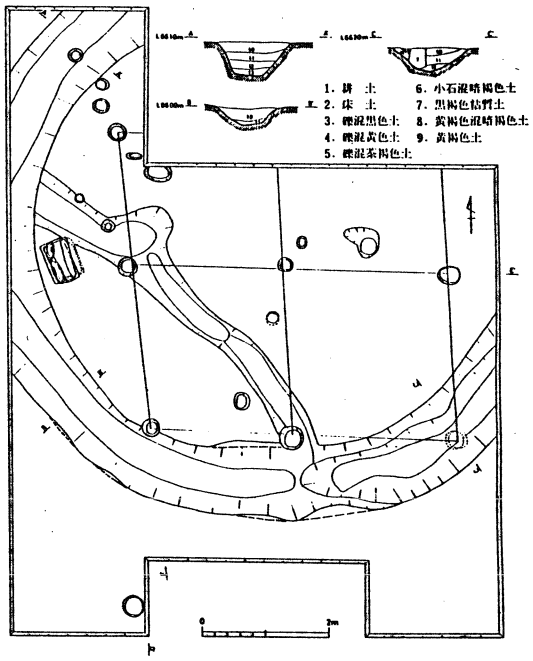
・ＳＸ－０１　外径南北7.1ｍ・東西6.7ｍ，幅約0.6～0.9ｍで不連続円形周溝をもつ遺構です．周溝は深いところで約３０～４０cmあり，住居址とは考えにくく，今のところ円形周溝墓になるのではないかと思われます．

・ＳＸ－０２　外径6.5ｍ，幅0.4～0.9ｍでＳＸ－０１同様不連続の円形周溝をもつ遺構です．

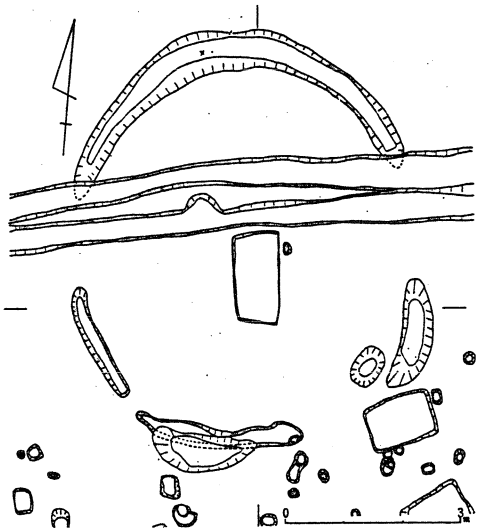
○土壙１（ＳＫ０１）　調査区中央で検出されました．東西5.5ｍ，南北約３ｍの平面形が台形をしています．内部には，炭化木をはじめ多量の弥生土器が出土しており，土器溜めの土壙と思われます．



姫路市　八幡遺跡



八鹿町　米里遺跡



太子町　川島遺跡

兵庫県下における
円形周溝墓検出例

13

出土遺物

出土遺物は弥生土器，土師器，須恵器（中世須恵器も含む）瓦器，滑石製紡錘車，滑石原石が出土していますが，整理作業はまだ進行中で，その詳細は後日報告したいと考えています．

出土遺物中注目されるのは，やはり滑石製紡錘車と滑石原石です．郡家遺跡内において滑石が発見された例として，先にも触れた御影中町地点です．ここからは滑石製勾玉模造品，臼玉等が祭祀遺構から出土しています．紡錘車と勾玉模造品とは石材が類似し，出土した原石と臼玉とは石材が類似しています．

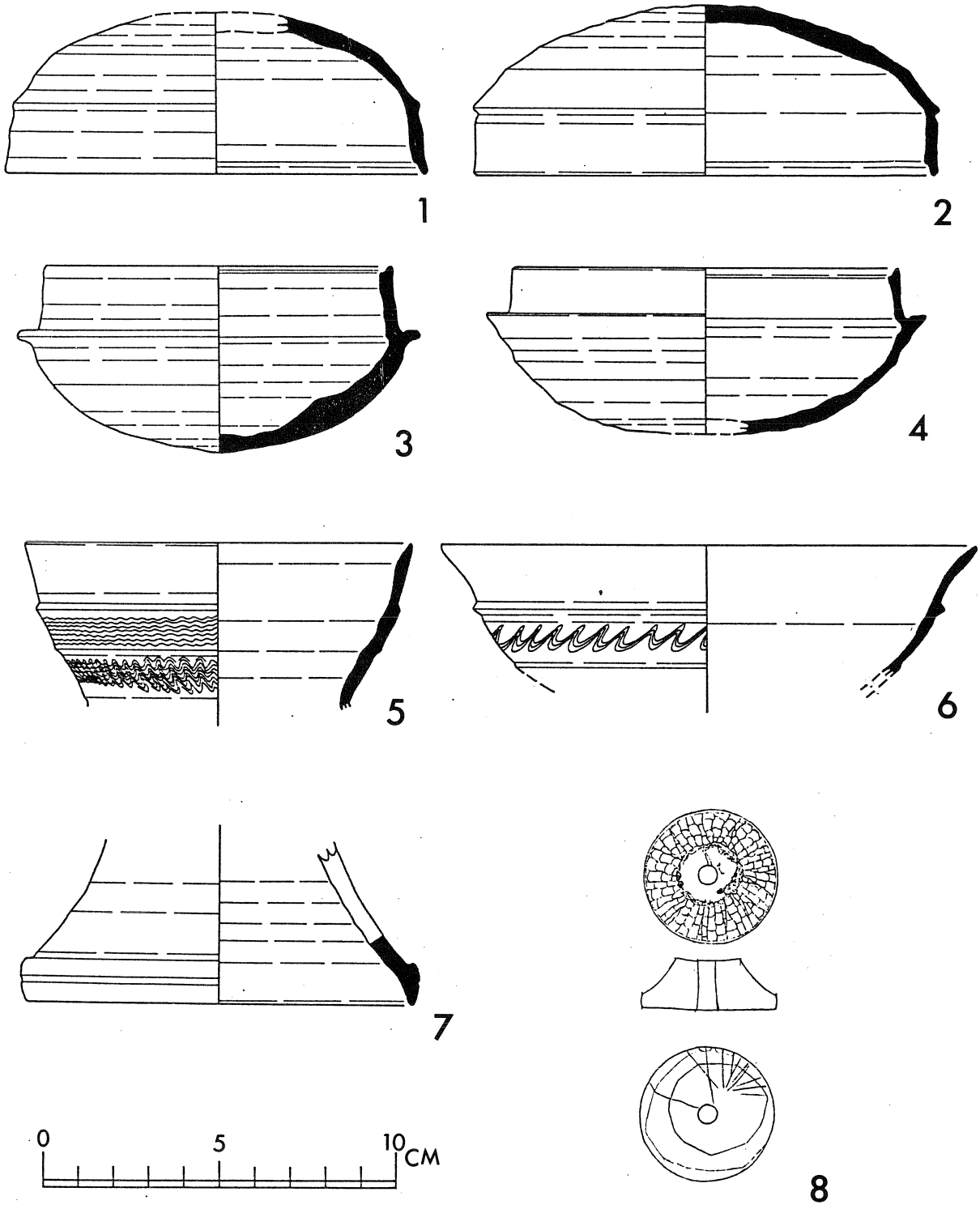
まとめ

今回の発掘調査によって「菟原郡衙」を裏付けるような時期の遺構こそ検出されませんでしたが，弥生時代から鎌倉時代にかけての遺構が多く発見されたことは，この地域の歴史を明らかにする資料が提供されたことになり意義深い調査であったということができます．

特に円形周溝墓は、神戸市内において初めて確認されたものです。

このあたり周辺は弥生時代中期後半から後期にかけて人々が生活を営なむようになったと考えられますが，古墳時代後期以前に天神川の大はんらんがあったようで，弥生時代の生活面の多くが流出しています．

これを裏付けるように，その上には洪水によって運ばれたと思われる砂の堆積が見られます．その後は比較的安定した生活環境が維持された様子もわかりました



出　土　遺　物　実　測　図

1～4、6　SB04出土　　5、7、8　SB03出土

周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	時期	立地	出土遺物・遺構等
1	郡家	弥生後期 鎌倉		掘立柱建物・周溝状遺構等
2	伯母野山	縄文後期 弥生中期	山頂 山腹	住居址・壺棺・土器・石器・鉄器
3	桜ヶ丘B	旧石器 弥生中期	尾根	住居址・土器・石器
4	桜ヶ丘	弥生	山腹	銅鐸14口・銅戈7口
5	桜ヶ丘(申新田)	縄文前期	山腹	
6	篠原	縄文晩期 弥生中後期	山麓	遮光器土偶・石棒・土器・石器
7	滝ノ奥	旧石器 室町	尾根	経塚・火葬墓・掘立柱建物址・石鏡13・合子6 経筒・独鈷杵・古銭など
8	赤塚山	弥生中期	山腹	土器
9	荒神山	弥生中後期	尾根	住居址・土坑・石器・土器
10	岡本梅林	弥生	山腹	土器・石器
11	金鳥山	弥生中期	山腹	住居址・土器・石器
12	保久良神社	弥生中期 奈良・平安	山腹	銅戈・土器・石器・瓦
13	生駒	弥生	山腹	銅鐸
14	森北町	弥生中後期	山麓	土器・石器
15	三条岡山	弥生後期 鎌倉・室町		土器・石器
16	山芦屋	縄文早期		押型文土器・石器
17	会下山	弥生中後期	尾根	住居址・墓址・漢式三角鏃・土器・石器
18	朝日ヶ丘	旧石器 縄文前期	山腹	ブレイド・石鏃
19	深江	弥生	扇状地	土器・石器
20	渦ヶ森	弥生	山腹	銅鐸
21	坂下山	弥生中期	山腹	土器・石器
22	森奥	弥生後期	尾根	土器
23	森	弥生	山腹	銅鐸
24	本山中町	弥生	扇状地	土器・石器
25	田中町	弥生前中期	扇状地	土器・石器

番号	古墳名	墳形	規模 全長	出土遺物等	備考
A	西求女塚	前方後円	東面 約90M		現存
B	処女塚	前方後方	南面 約69M	葺石・箱式石箱・勾玉	〃
C	東求女塚	前方後円	西面 約 M	銅鏡6・車輪石・刀	一部残存
D	坊ヶ塚	〃	南面 約40M	詳細不明	消滅
E	ヘボソ塚	〃	西面 約60M	銅鏡6・石釧・車輪石・玉類	〃
F	鴨子ヶ原群集墳			詳細不明	〃
G	伊賀塚			〃	〃
H	庚申塚			〃	〃
I	一王山			銅鏡2・勾玉・鉄鏃・管玉・小玉・甲冑	〃
J	岡本梅林群集墳			刳抜小型石棺・家型石棺・刀・土器	〃
K	生駒群集墳	円		横穴式石室	半壊
L	城山南麓群集墳	〃		〃	〃
M	三条群集墳				
N	親王塚	円?	約36M	銅鏡4	現存

下　宅　原　遺　跡

発掘調査現地説明会資料

昭和59年2月19日

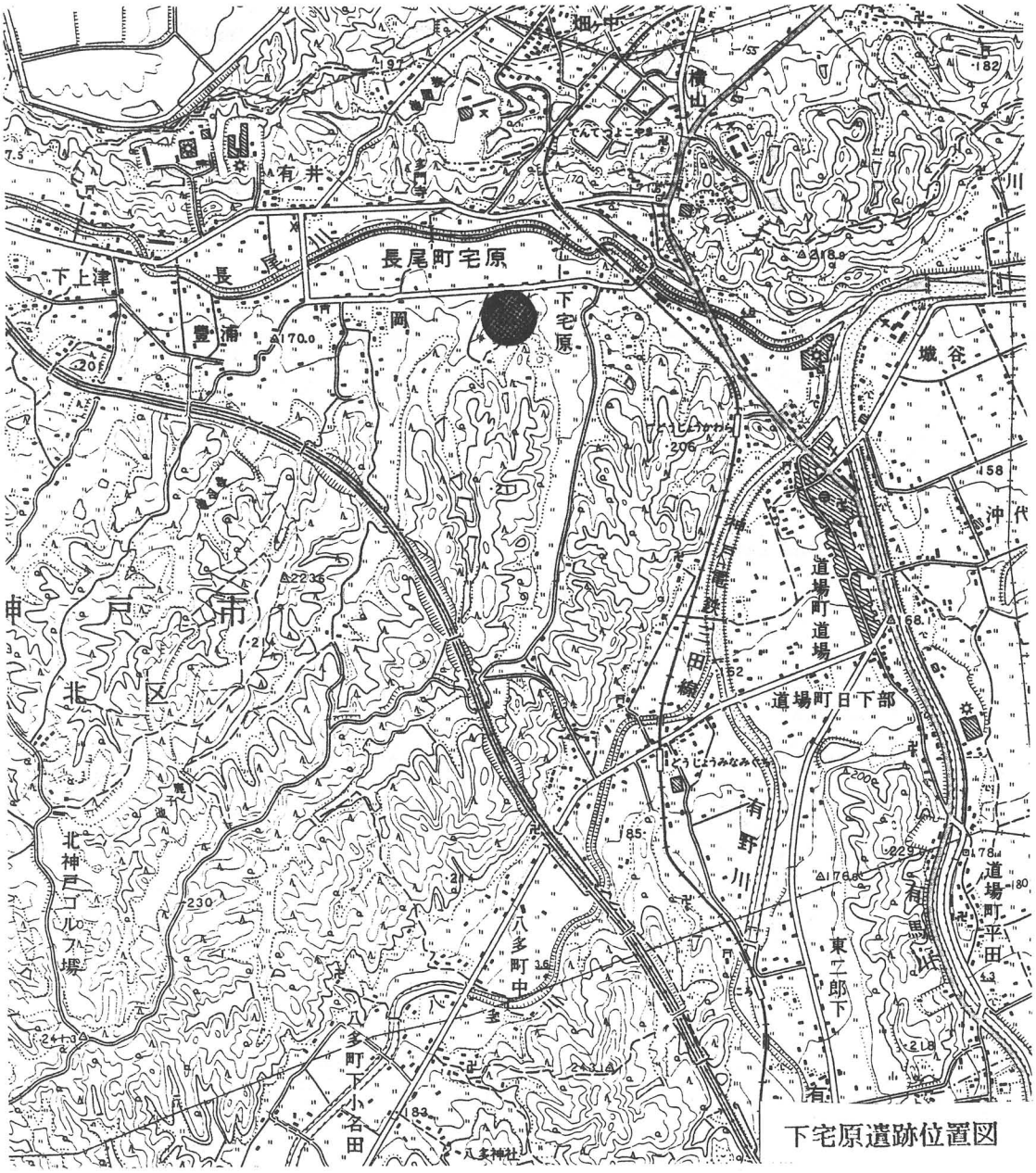
神戸市健康教育公社

神戸市教育委員会

しもえいばら
下宅原遺跡発掘調査概要

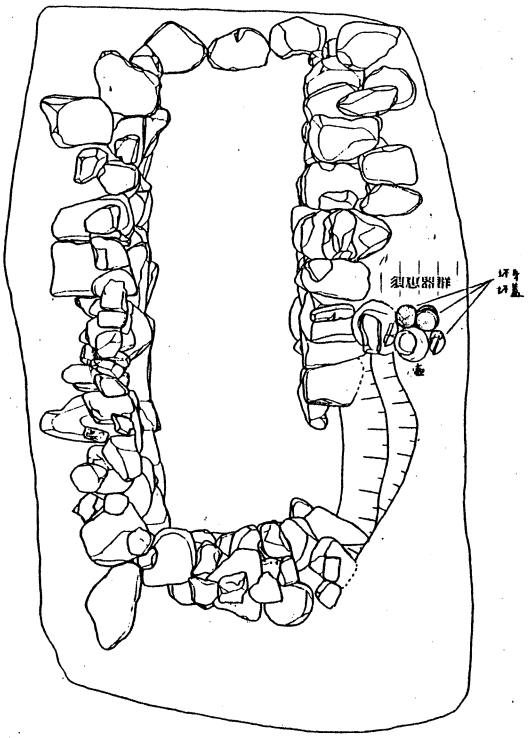
経　過

長尾町・道場町は、北神三団地の造成、周辺の土地改良事業により大きく変容しようとしています。これらの造成工事に伴う発掘調査で、今日まで知られていなかった遺跡が数多く発見されるようになってきました。

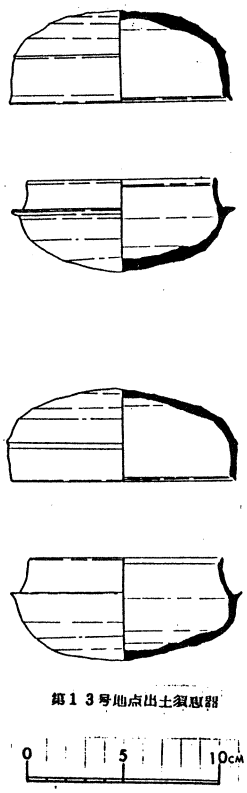


下宅原遺跡位置図

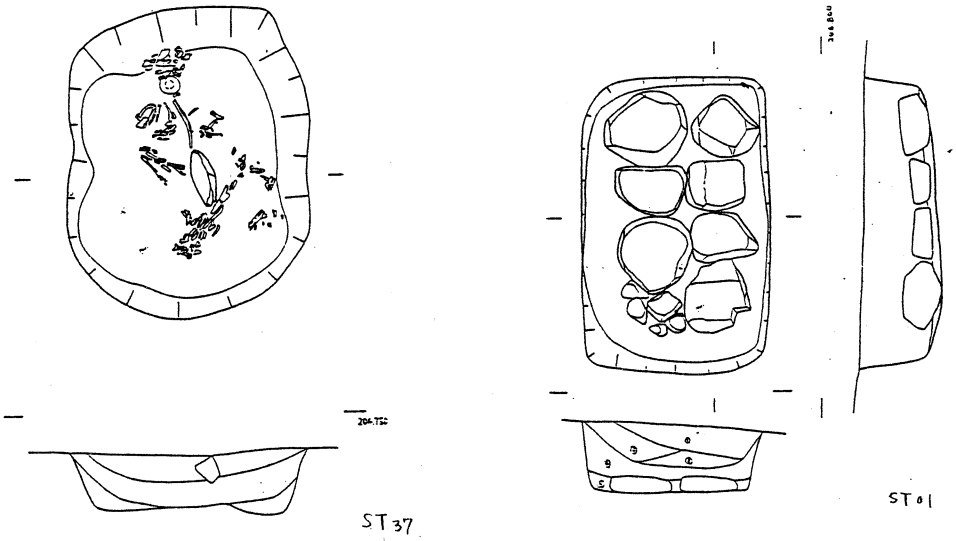
北神三団地の区域内では、昭和54年12月から発掘調査を行っています。これまでに弥生時代の集落址、古墳時代の竪穴式石室、室町時代の火葬址等多くの遺跡を調査してきました。



第13地点 石室平面図



北神三団地内遺跡第13地点



北神三団地内遺跡第47地点（火葬墓）

今回の下宅原遺跡は、北神第１地区の工事用道路建設と土地改良事業に伴う造成工事に先だって昭和58年10月に試掘調査を行いました。その結果、広範な地域に広がる遺跡であることが確認されました。遺跡の大部分は、盛土のうえ保存されますが、道路部分やパイプラインが埋設される部分は、記録保存になるため、全面発掘調査を実施することになりました。発掘調査は、昭和58年12月20日から道路敷となる部分（約1600㎡）について実施しています。

調査地位置図

周辺の遺跡

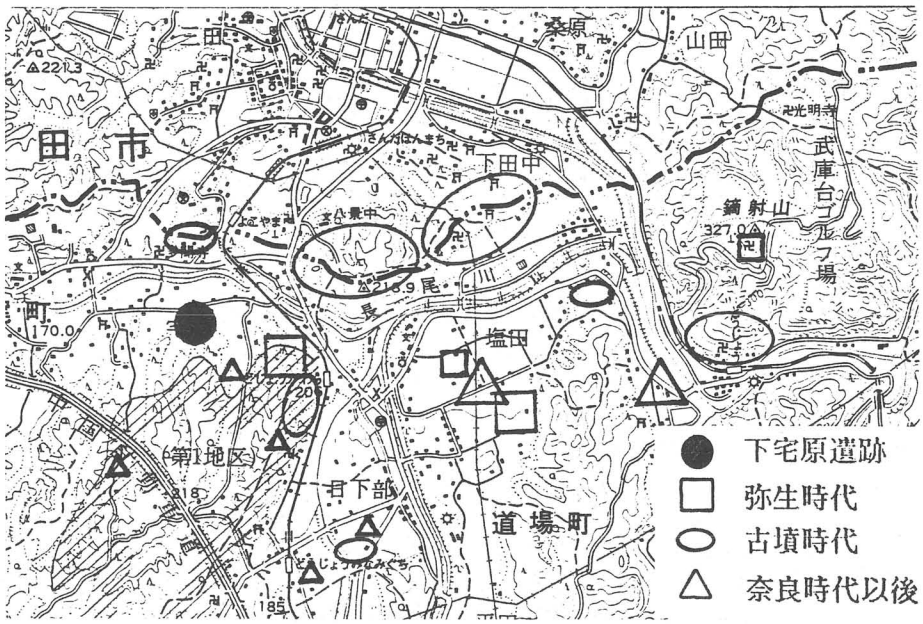
日本列島に人が住み始めたのは今から10万年前頃です。それ以後１万年前頃までの間を旧石器時代と呼んでいます。その頃の人々が北神地域に住んでいた痕跡は、まだ知られていません。

次の縄文時代には、淡河町の中山大杣池付近で土器が採集されており、人々の足跡が感じられますが、まだ詳しいことはわかっていません。
弥生時代も前期の遺跡は、知られていませんが、中期になると長尾町宅原の丘陵上や三田盆地周辺の丘陵上に大きな集落が現れます。それ以後人々は、北神地域にも住みつづけ集落や墓があちこちで知られています。

古墳時代には、丘陵上やその裾に大きな墓（古墳）を造るようになります。道場町塩田、生野、日下部、長尾町宅原には６世紀頃の古墳がたくさん知られています。中でも道場川原駅の西側丘陵上にある前方後円墳は、この地域の最も有力な人が葬られたものでしょう。

奈良時代には道場町生野に大きな建物があったらしく、柱跡などが見つかっています。長尾町内でも土器などが出土したことは知られていますが、また建物跡は、見つかっていません。

平安時代、鎌倉時代には、道場町、長尾町付近でたくさんの遺跡が知られていますが、集落全体の規模などわかるものは、今のところ発見されていません。下宅原遺跡の発掘調査は最初の大規模面積の調査で、その成果が期待されます。



下宅原遺跡周辺の遺跡分布図

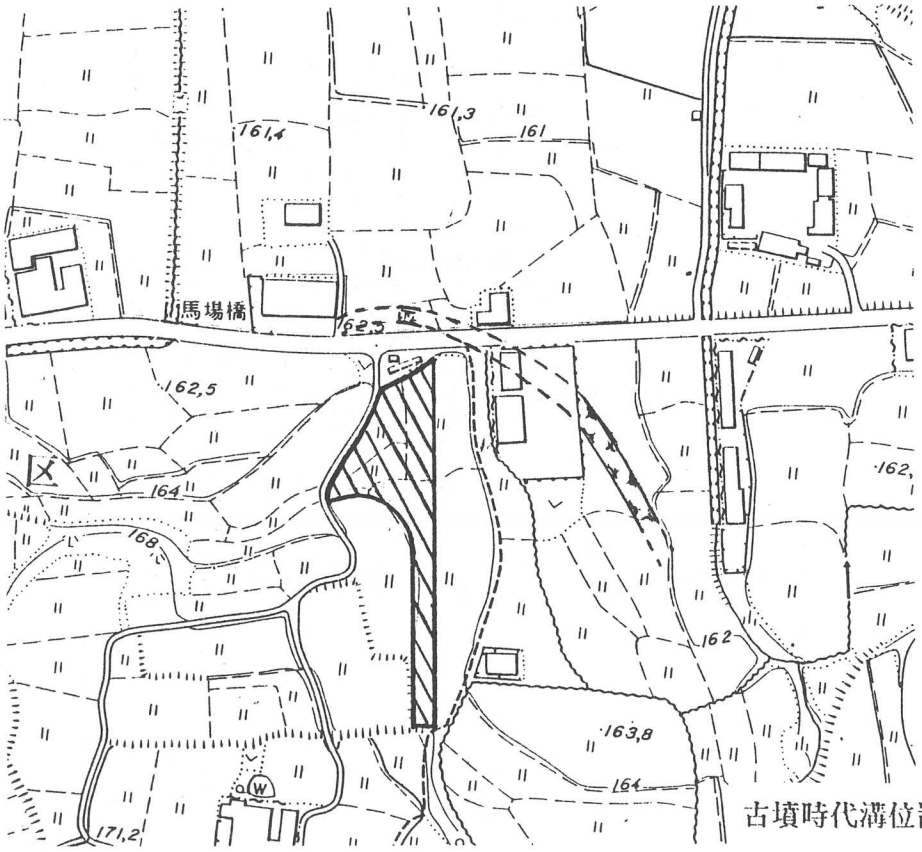
遺跡の概略

下宅原遺跡は、弥生時代、古墳時代、鎌倉時代の人々が同一地区で生活を営んだ大複合遺跡です。

この遺跡で人々が生活を始めたのは、弥生時代後期からだと考えられます。今回の調査地区内では、住居址は確認できませんでしたが、今後発見される可能性は大きいでしょう。　古墳時代は、最も古い時期（4世紀前半）から新しい時期（6世紀後半）まで人々が生活をしています。6世紀の前半には台地の裾部をとりまくように幅3m、深さ1mの溝をめぐらし、その内側の高い部分に竪穴住居址や掘立柱建物を造っています。

その後の奈良・平安時代の遺物はわずかに出土していますが、明確な遺構は確認されていません。

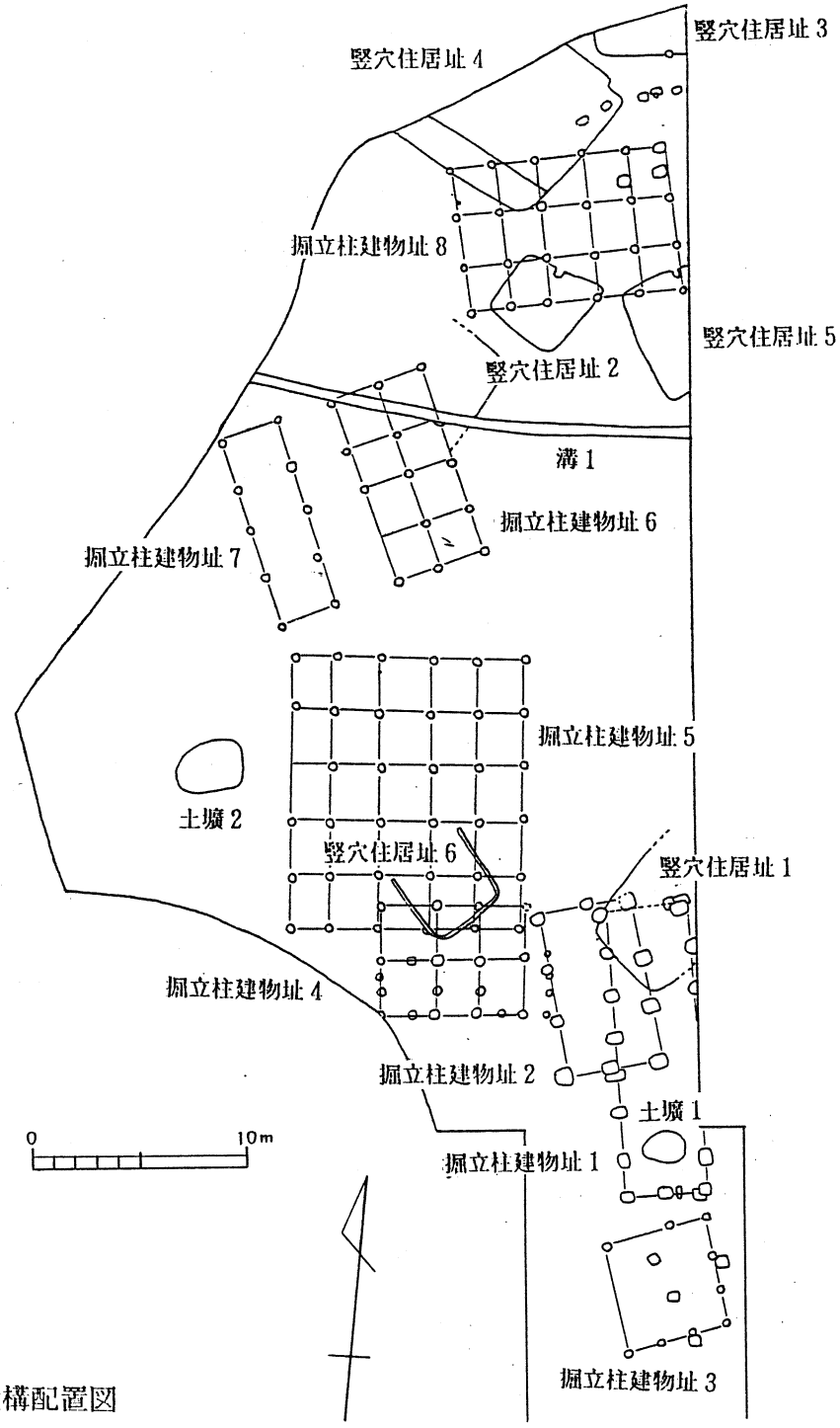
鎌倉時代の前半（13世紀）になると大規模な掘立柱建物群が建てられます。これらはすべて総柱の建物で、一般的には倉庫と考えられますが、この遺跡のものは、おそらく人々が住居として用いたものであろうと思われます。なお出土遺物の中には当時中国で生産されていた磁器も含まれています。



古墳時代溝位置図

遺　構

今回の調査で検出された遺構は、弥生時代末～古墳時代初めの土壙１基古墳時代中期前半の竪穴住居址２棟、古墳時代後期中頃の竪穴住居址３棟、掘立柱建物址２棟、溝１条、鎌倉時代前半の掘立柱建物址５棟と土壙１基です。



遺構配置図

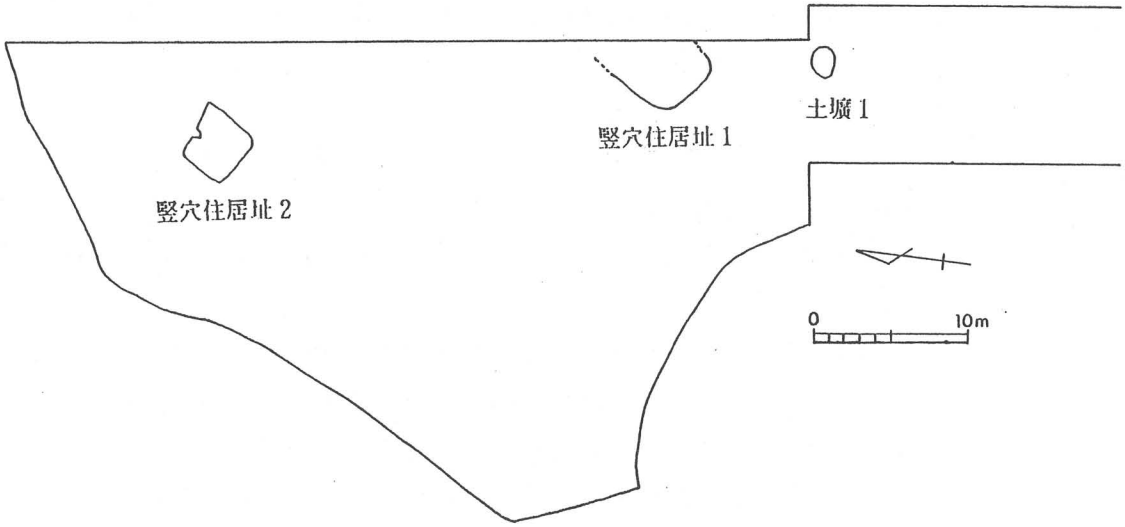
① 弥生時代末～古墳時代初め（４世紀初め・約1700年前）の遺構

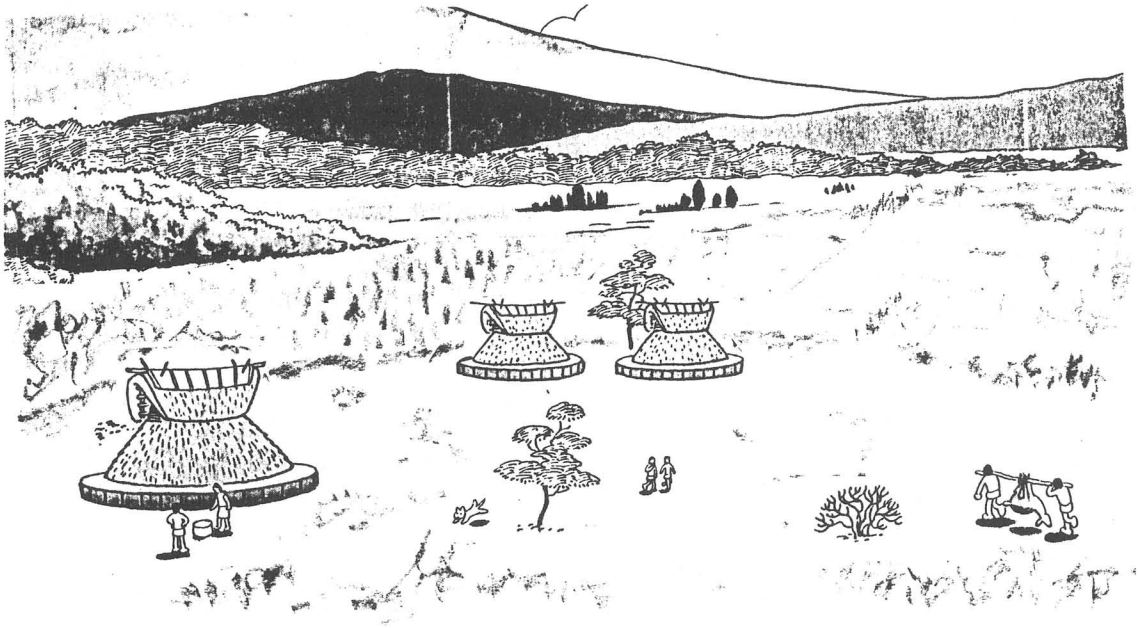
・土壙１　東西 2.0m、南北 1.5mの楕円形で炭と共に壺・甕が出土しました。

② 古墳時代の中期前半（５世紀前半・約1550年前）の遺構

・竪穴住居址１　東西５m以上、南北 4.6m内部の壁添いには周壁溝が巡っています。この住居内から小型丸底壺７、二重口緑壺１、甕２などが出土しています。

・竪穴住居址２　東西 4.0m、南北 4.2m、北東の一辺の中央にカマドをもつものです。普通カマドは粘土で作りますが、これは住居が作られる時、この部分だけ掘り残すようにして作られています。





③　古墳時代後期中頃（6世紀中葉・約1400年前）の遺構

・竪穴住居址3　東西 4.0m以上、南北 1.2m以上。調査区の北端で検出され、地区外に広がっているため一部しか発掘できていません。

・竪穴住居址4　東西 7.8m以上、南北 7.7mを測る大型の住居址です。この住居はもと一辺約6mのものが、2回にわたって拡張された結果、この大きさになったものと思われます。

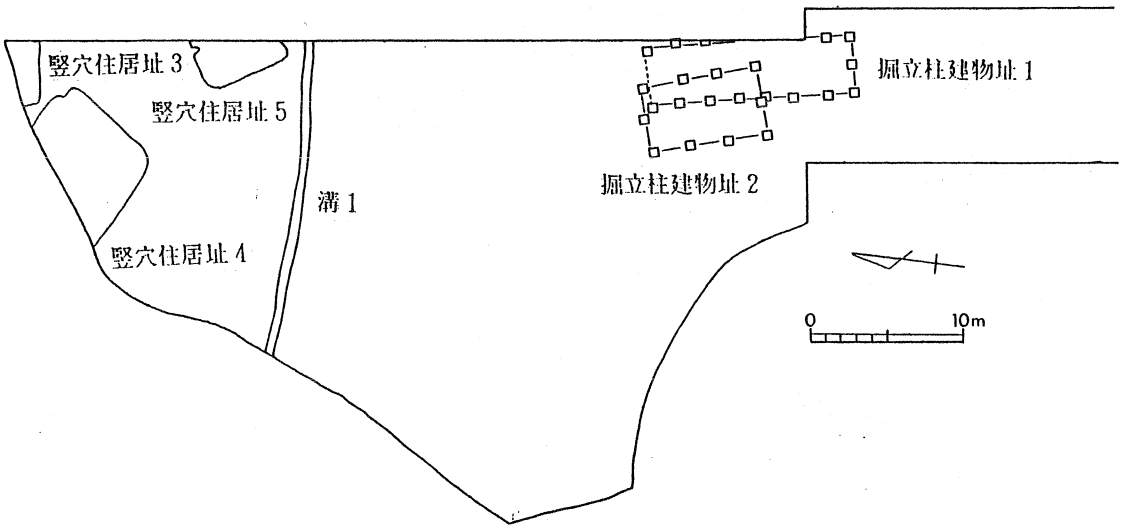
・竪穴住居址5　東西 4.4m以上、南北 5.6m。北辺の中央と思われる位置に竪穴住居址2と同様の作りカマドを持っています。

・この他竪穴住居址の周壁溝と思われるものが竪穴住居址1の北西で検出されていますが、時期は確定できません。（竪穴住居址6）

・掘立柱建物址1　東西2間（3.7m）、南北7間（13.4m）の長大な建物です。

・掘立柱建物址2　東西2間（4.5m）、南北3間（7.7m）。掘立柱建物址1の北東に重なるように検出されました。掘立柱建物址1の後で作られたものです。これら2棟の建物は、束柱が存在していませんでした。

・溝1　幅・深さとも0.45mを測り、長さは現在20mまで確認していますが、東西にさらに延びるものと思われます。同時期の竪穴住居址（竪穴住居址3～5）3棟はこの溝の北側に集中しており、溝1が1時期、集落の南を区切る役目を果たしていたものと考えられます。



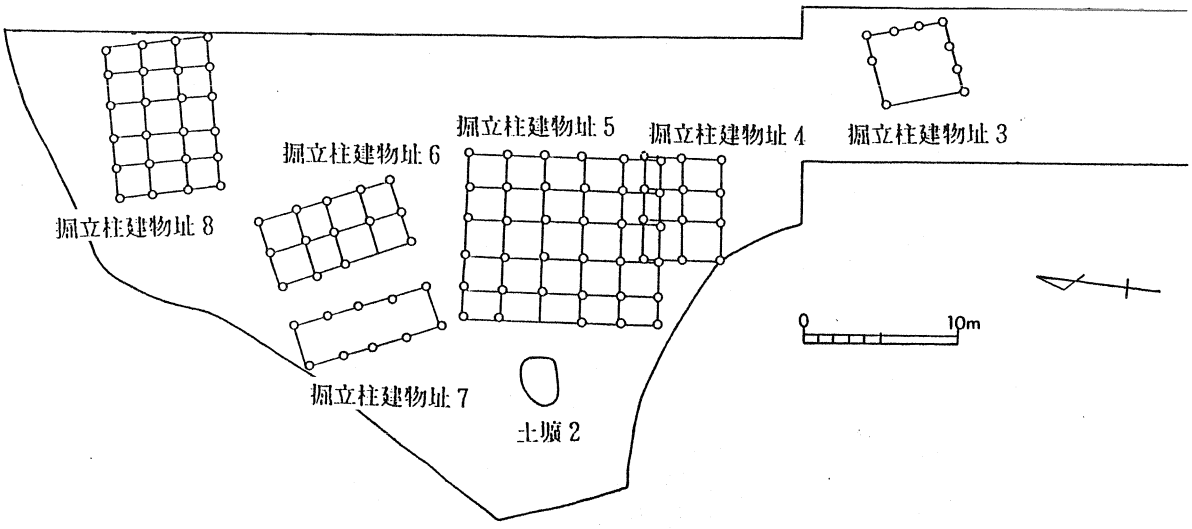
④　鎌倉時代（13世紀前半．約 800年前）の遺構

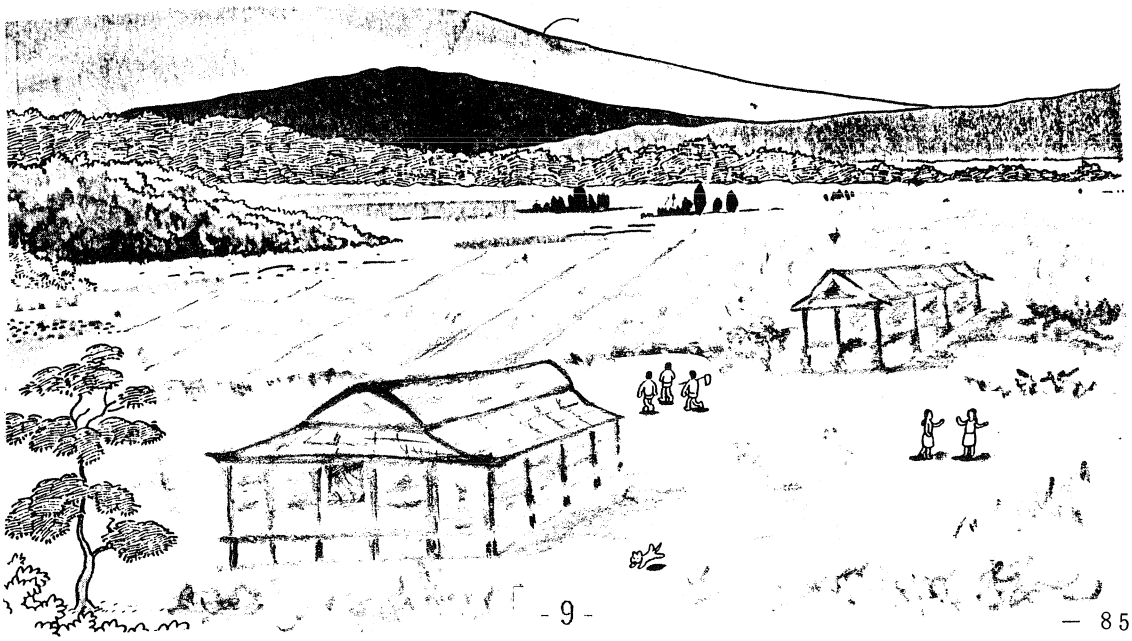
・掘立柱建物址３　東西３間（ 4.8m）、南北３間（ 5.6m）。西辺の柱穴や束柱は検出されませんでした。

・掘立柱建物址４　東西３間（ 6.8m）、南北２間（ 5.2m）で束柱をもつものです。

・掘立柱建物址５　東西５間（10.7m）、南北５間（12.7m）の規模を持ち、今回検出した掘立柱建物では最も大きなものです。これも前者同様総柱の建物です。柱穴には土器や炭の入ったものがあります。

・掘立柱建物址６　東西２間（ 4.4m）、南北４間（ 9.0m）の建物で、西隣りの掘立柱建物址７と平行して並んでいます。これも束柱があります。





・掘立柱建物址７　東西１間（ 2.9m）、南北４間（ 9.0m）
・掘立柱建物址８　東西５間（10.0m）、南北３間（ 6.7m）で、
掘立柱建物址５に次ぐ規模を誇ります。
・土壙２　東西 3.0m、南北 2.1mの隅円長方形の土壙で、中から
焼石と共に完形の須恵器小皿２、同碗２が出土しました。

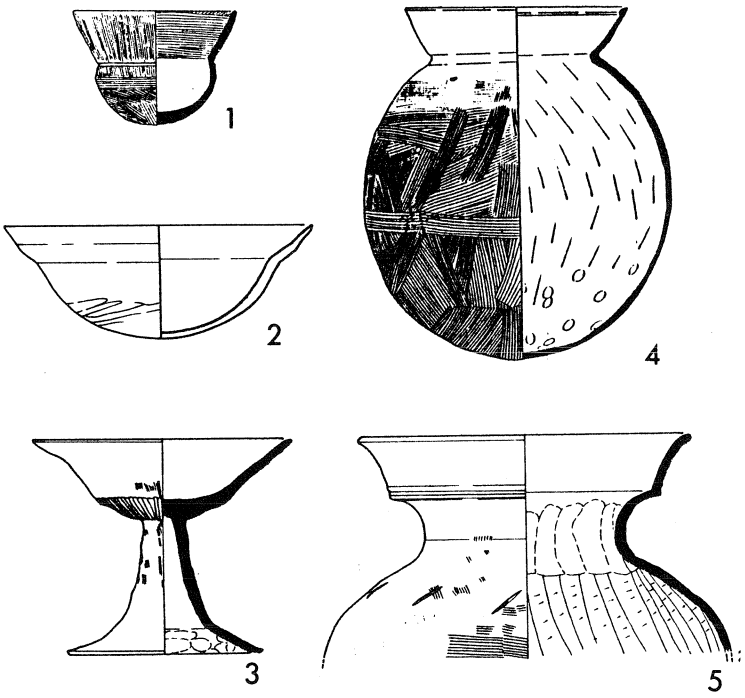
遺物

古墳時代

４世紀前半の土器が土壙１から出土しています。その中には、山陰・北陸地方の特徴をもつ甕形土器が入っており、当時これらの地域と交流のあったことがわかります。

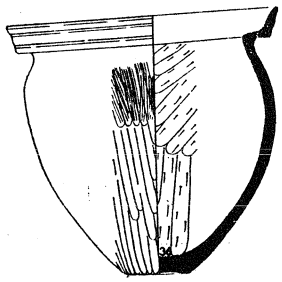
５世紀前半の土器は、竪穴住居址１．２から出土しています。特に竪穴住居址１からは、小型丸底壺と呼ばれているものが７個も出土しているのが特徴的です。

６世紀前半から後半にかけての土器は、竪穴住居址３～５及び溝から出土しています。もっとも多いのは、須恵器の坏でほかに　、甕等もあります。

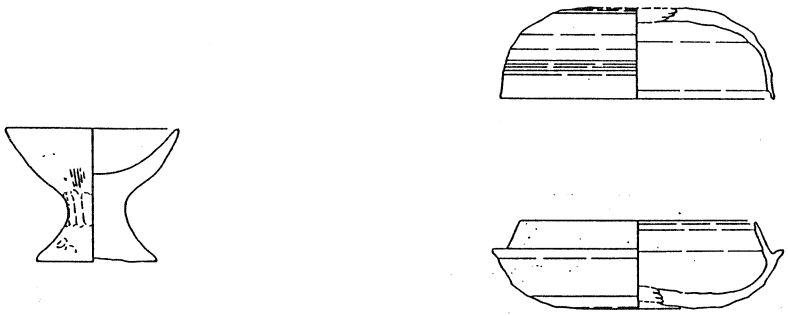


古墳時代前半の土器のセット

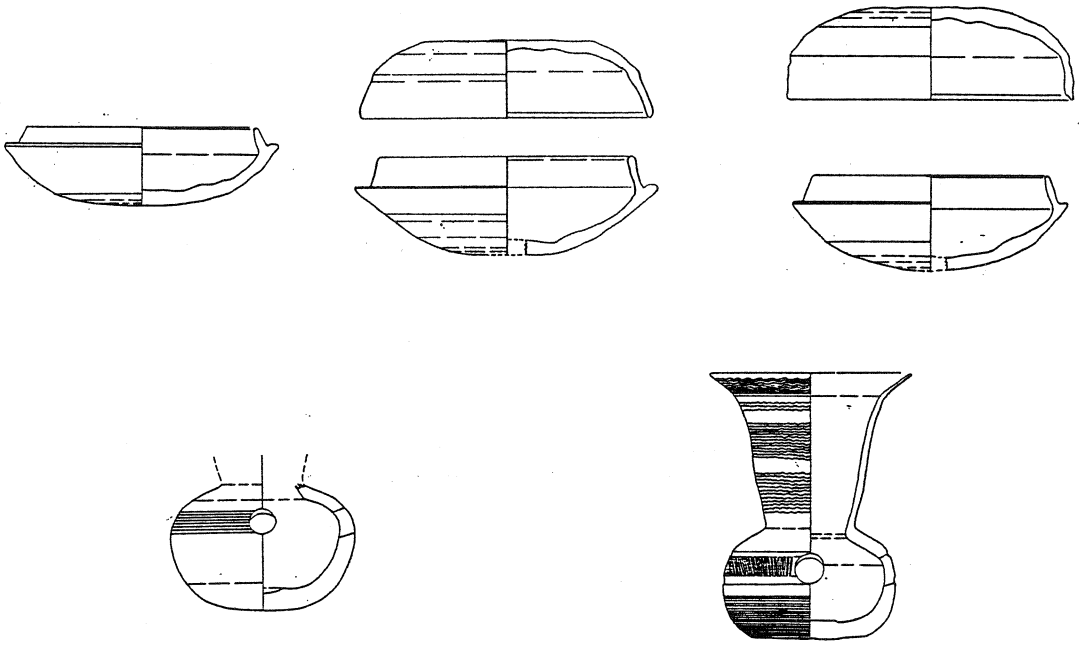
①が小型丸底壺



山陰・北陸系の甕



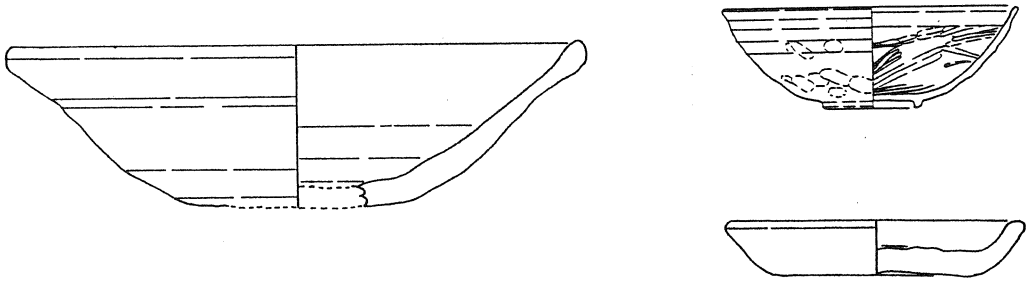
竪穴住居址 4 内出土土器



溝中出土土器

鎌倉時代

もっとも多いのは、須恵器で碗・皿・鉢・甕等があります。その他他に土師器・瓦器、磁器があります。磁器は、当時中国で生産されていたものが日本に輸入されたもので、白磁碗・青白磁合子等があります。

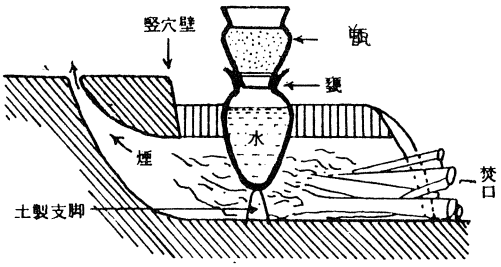


鎌倉時代遺物包含層中出土土器

まとめ

下宅原遺跡は、弥生時代後期に始まり、鎌倉時代まで、人々が生活を営み続けたあとであることがわかりました。これまで知られている北神地域の遺跡の中では、もっとも大規模なものです。以下、今回の調査でわかった重要なことを時代をおってまとめると

1．竪穴住居址にかまどを有するものが2棟出土しています。通常かまどは粘土をかためて形造っていますが、当遺跡のかまどの特長は、住居址の床面を堀り下げ造りだしていることです。又、このかまどのうちの1つは5世紀前半に属するもので兵庫県下ではもっとも古いものの1つです。



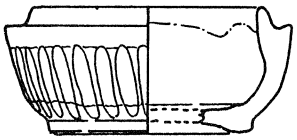
図－74　かまど構造の模式図
（日本生活文化史2より）

2．当遺跡は、台地上に住居址が営まれています。6世紀前半にはそれを囲むように幅3m、深さ1mの溝がめぐらされているようです。弥生時代には多くの例が知られていますが、古墳時代のものとしては、めずらしいものです。また竪穴住居址と、掘立柱建物の建てられている場所が溝によって別けられているようです。

3．周辺には、数多くの古墳が造営されていますが、これまでその母体となる集落は、全く不明でした。しかし、今回の発掘調査で確認された住居址に住んでいた人々が、これらの古墳を営んだと考

えることも出来るようになりました。

4．鎌倉時代の掘立柱建物は、6棟発見されていますが、5間×5間といった大規模なものがあることや、青白磁合子が出土していること等から豪農の館跡ではないかと考えられます。



青白磁合子